

京都大学シンポジウムシリーズⅣ：

「災害と宗教と『心のケア』～東日本大震災現場からの報告と討議」

プログラム

日時；7月20日（水）13時～17時

開催場所：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

テーマ：「宗教と災害～東日本大震災の現場からの報告と討議」

第一部：13：00～15：00

進行：コーディネーター・司会：鎌田東二による趣旨説明 10分

基調報告：

島藺進（東京大学教授）「『宗教者災害支援連絡会・情報交換会』の活動と課題」30分

玄侑宗久（福島県三春町福聚寺住職・作家）「福島県での被災状況と被災地支援の現状および復興構想会議の報告」30分

事例報告：

稲場圭信（大阪大学准教授）「『宗教者災害救援ネットワーク』の活動と課題」20分

金子昭（天理大学教授）「新宗教の災害支援活動の事例と課題」20分

（休憩15分）

第二部：15：15～17：00

指定討論者：河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授・臨床心理学）10分

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター准教授・文化心理学）10分

討議

第一部 趣旨説明 鎌田東二

それでは時間がまいりましたので、本日のシンポジウム「災害と宗教と『心のケア』」を開催させていただきます。

通常ですと黙祷を捧げるところから始めるのですが、私はフリーランス神主としてさまざまな活動をさせていただいておりますので、追悼と鎮魂の思いを、法螺貝を吹くことを通して表したいと思っております。ご理解いただきければと思います。

（法螺貝演奏）

次に、開催趣旨をお話させていただきます。

こころの未来研究センターでは、「こころの再生に向けて」という東日本大震災に関わる研究プロジェクトをこの4月から立ち上げました。そのプロジェクトを踏まえて、本シ

ンポジウムでは災害後の宗教の動向と心のケアの問題に焦点を当てながら、それぞれの現場で活動されている連携研究員の方々に報告していただき、それを踏まえてパネルディスカッションをしていきたいと思ひます。

現在、わたしが担当する研究プロジェクトの連携研究員は5名で、みなさんそれぞれの現場で活動されています。まず、被災地仙台の「こころの相談室」の事務局長を務めている宗教学者の鈴木岩弓東北大学教授ですが、残念ながら今回は本務のお仕事のため参加できませんけれども、第2回目に参加していただきます。そして島菌進東京大学教授が代表を務めている「宗教者災害支援連絡会」、また禅僧で作家の玄侑宗久氏が委員を務めている「復興構想会議」、稲場圭信大阪大学准教授が共同代表を務めている「宗教者災害救援ネットワーク」、金子昭天理大学教授が関係している新宗教の活動、および事務局長を務めている「支援のまちネットワーク」の状況、活動などをまず話していただき、問題提起をしていただきます。

それを踏まえて、こころの未来研究センターの臨床心理学、河合俊雄教授、また文化心理学からは内田由紀子准教授が、それぞれの立場からコメントし、またパネルディスカッションというかたちで進めていきます。タイムスケジュールについては、皆さまのお手元にある資料のとおりです。

こころの未来研究センターのこのプロジェクトは、どういう目的で、どういう計画を立てているかということについて、簡単に話をしていきます。

本研究プロジェクトは私と内田由紀子さんが中心になって進めているのですが、私の方は今日、第1回目の研究集会として、それぞれの連携研究員の報告をまずきちんと聞き、どういうところに問題があるのか、どういうところに特徴があるかを確認し、それをもとにこれから先の方角を考えていきたいと考えております。

私自身は、伝統文化の心と体のワザ、あるいは伝統芸能や聖地文化・癒し空間などの活用の問題と、これからの先の脱原発ないし卒原発社会などの社会デザインをどう構想していくか、その際、宗教的「世直し」思想はどのような役割や社会ビジョンとなりうるか、いままでの事例を検討しつつ、これからのこと考えていきたいと考えております。

一方、内田由紀子准教授が進めようとしているのは、社会心理学や文化心理学からのアプローチです。若者の適応感・不適応感の研究や、ソーシャルサポートの問題などを中心に、メディアや報道のありよう、その文化差、文化間相違点などを取り上げて検討していきます。

さて今回、3月11日に東日本大震災が起りましたが、16年前の阪神・淡路大震災と大きく違っていることがあります。被災の内容と規模が違っているということが、まず一番大きな違いです。同時に私たちの宗教研究の立場からすると、宗教界の活動がこれほど活発に支援活動に向けて動いていることも大きな違いとして見えてきます。ここには、社会的危機と危機認識が、この15年、16年で変わってきているという背景があると思ひます。

宗教的活動としては、祈りや祭祀や儀礼・修法、また傾聴ボランティアなどいろいろ

なところで行なわれておりますし、物質的な救援活動も進んでおります。そういう中から、「まるごとのケア」というケアの在り方も提示されてきております。

鈴木岩弓東北大学教授事務局長を務めている「こころの相談室」の活動。これは宗教者と宗教研究者と医療従事者の三者の協力によってできています。これから先の社会連携、ソーシャルサポートの一つのモデルになっていく可能性を持った活動だと思います。

その「心の相談室」は活動の開始に当たって、5月2日に宮城県庁で記者会見をしました。そこで、医療の問題、メンタルヘルスの問題、生活の問題、宗教の問題をトータルにケアしていくという「こころの相談室」の方向が語られました。これもまた16年前と違う動きです。

それから、島菌進さんが代表となった「宗教者災害支援連絡会」のいち早い立ち上がり。それに関係して稲場圭信さんたちの「宗教者災害救援ネットワーク」や金子昭さんたちの「支援のまちネットワーク」の活動もいままでと違う新しい展開が見られます。

こころの未来研究センターでは、日本箱庭療法学会、日本ユング心理学会震災対策合同ワーキンググループの委員長に河合俊雄さんが就任して、ケアをする人のケアとか、いろいろ被災してきた重点校へのカウンセラーの派遣など進めつつあります。また内田由紀子さんがソーシャルサポートやメディア報道の文化間比較などに取り組んでいます。私は何回かに分けて被災地4県を巡ってまいりました。

今日は、仏教については島菌さんと玄侑さん、新宗教については稲場さんと金子さんがそれぞれの角度から報告していただけたと思いますので、私の方からは被災地の神社について少しばかり報告しておきたいと思います。

宮城県と岩手県の浪分神社、鼻節神社、塩竈神社、葉山神社、釣石神社、愛宕神社などを巡ってまいりましたが、非常に印象に残ったのは「浪分神社」です。その名前に象徴されていますが、この神社そのものが大津波を経験して「浪分」という名前になり、さらにそこにさまざまな物語や伝説が付与されていきます。

いずれにしても、ここまで波がやってきた。ここから先は危険なのだよという、防災ラウンドマークになっている神社が宮城県仙台市若林区にある。その東側と西側では大きく異なっております。東側の方は、つまり海沿いは壊滅的な状況です。しかし、浪分神社よりも西はまったく無事です。

また被災地の中でも、もちろん津波に流された神社もあれば、流されなかった神社もあるのですが、例えば宮城県気仙沼市の紫神社のように、高台にある神社はもちろん大丈夫で、そこが避難所になり、避難者や地域コミュニティーの支えとなる機能を十分に果たしていました。

もう一つは、石巻市雄勝町ですが、中央公民館の2階の屋上にバスが漂着して止まっているほどの高波が押し寄せました。この地域には、国指定重要無形民俗文化財の「雄勝法印神楽」があります。しかし、その神楽の衣装も神社も流されてしまった。

その地区では、九十何パーセントの人が避難所生活をしているのですけれども、彼らが

もう1回神楽を復興の礎、絆にしたいと動き始めた。来年、どうかたちで神楽を奉納することができるか。これを地域の復興の兆しにして励みにしているということを聞いてきました。

その神楽保存会の会長さんは今なお行方不明です。そこで副会長さんにお会いして、いろいろとお話を聞いて、これから先大変だけれども、まず神楽を復興する中で地域復興を図っていききたいと語られていました。

雄勝町の少し北の石巻市北上町の釣石神社には、「釣石」と呼ばれる巨岩がありますが、この岩の上に人が逃げ登って助かった。その「釣石」には大変興味深い民間信仰がありまして、落ちそうで落ちないので、受験生たちが今年の正月には1万人も来たそうです。おそらく来年はもっと多い2万人ぐらいの人が来るかもしれません。

こういう民間信仰の動きも大変重要で、見逃せません。ある一つの大きな出来事があると、そこで縁起を担いだり、さまざまな物語が語られたりして、それが広がって行って、その地域の安心や支えを生み出していく。ユーモラスなところも含めて、庶民的な強靱や生命力を持っている。こういう機能も今回非常に重要であると再認識しました。

浪分神社と同じように、岩手県野田村の愛宕神社でも、鳥居の先がほとんど被害がありません。けれども、鳥居の前の海側は壊滅的な被害があります。この神社の立地も総合的に考える必要があると思いました。災害を研究していく際に、例えば巨大な岩がある、あるいは巨木があるということは、そこが地域的に100年、200年、千年、2千年と、安定して維持されてきたという証拠でもあります。災害多発地域の中で神社やお寺が果たしてきたものは、いったい何であったのか、という問いかけが必要だということです。

もう一つ、生きるということを深く考えさせられたのは、岩手県久慈市の山間部を走っていたときに、廃屋の茅葺の屋根の上に何本もの松が生えて育っている光景を見た時です。命というのは、どこでもしぶとく力強く生きていこうとする力があるのだ。そういう、どこでも生きていこうとする力というものを、これから先、われわれがどんな場面でも生み出していくことができるのか。クリエートしていくことができるかが問われていると感じたのです。

もう一つ、被災地に伝承されてきた神楽や虎舞いなどの芸能が避難所などで舞われたりすることによって被災者への大きな励みになったということも、伝統文化の見直しという点で考えさせられるものがありました。

それから、震災後100日の節目に、福島県相馬市中村神社や長友公園で、山形県羽黒山伏たちの祈りが捧げられましたが、私はこれに参加して、東北一帯に根差している修験道、特に羽黒修験道の持っている底力、ネットワーク、つながりも強く重要なものがあると思いました。

いま、私たちの研究プロジェクトの連携研究員の仲間近藤高弘さんという造形美術家がありますが、七ヶ宿という宮城県と福島県の県境で、登り窯で焼いた器を被災地に向けて届けようという、「命のウツワ・プロジェクト」を進めています。

このような、例えばお茶碗であるとかの、物を通して心に思いを届け、心のケアにつなげていくやり方も、瞑想やヨガや気功や体操など、体を使って心のケアをしていくあり方もあると思います。そういう、さまざまな心のケアへの取り組みの中で、連携研究員の大重潤一郎監督の作った記録映画『久高オデッセイ』という映画の上映もやっついでこうと計画中です。

そしてさらに、宗教本来の、祈りや祭りや儀礼や音楽や傾聴という取り組みがあります。こういうさまざまな角度やレベル、フェーズから、連携支援のありようを考えていくことが必要になってくると思います。

今日は、凶らずも大型台風が列島を直撃する中で、災害に関するシンポジウムを開催することになりました。これからの時代はほんとうに何が起こるか分からない。想定外の出来事が起こる時代の中で、時代の大きな重い課題も困難もあるけれども、われわれが備えや覚悟をして生きていかなければいけないことの必要を強く感じております。

このシンポジウムが「こころの未来」を構想し、切り開いていく一つのきっかけになることを心から願っております。発表者の先生方、また今日参会くださった皆さま方、充実した時間を持ちたいと思いますので、ご協力よろしくお願ひいたします。

続きまして、島菌進さんに基調報告をしていただきます。

基調報告

「『宗教者災害支援連絡会・情報交換会』の活動と課題」 東京大学教授・島菌進

皆さん、こんにちは。法螺貝を聞きまして、おなかの底に染みわたるような悲しみと同時に元気が出てくるというような響きに、私には聞こえます。そういうモチーフでお話をしたいと思うのですが。

いまご紹介いただきましたように宗教者災害支援連絡会というものを始めたのですが、その経緯と背景、同時に少し個人的な指摘と言いたいところがあるのですけれども、私個人がどういうことを、そこから引き出したいと思っているかという話をしたいと思います。

今回の災害では宗教が目立った。メディアは、だいたい宗教についてはスキャンダルの報道です。数十年間、とりわけオウム事件のときなどは典型的ですが。なかなか宗教本来のものというのが一面とか社会面とかに現れることはないのですが、今回はそういうことあった。

これは4月1日の『河北新報』ですが、たぶん若い僧侶の方が、いかにも僧侶らしい格好で、いま鎌田さんの話にも現れてきたような、津波被害の非常に悲惨な悲しい情景のもとで、こういう写真が出るということは、私はもうこれ以外にやれることがないといひますか、そういうことをよく表していると思います。祈りの姿を新聞も伝えたかったという、読経をされているわけですが、そういうことがしばしば現れました。

これは4月28日ごろでしたかね。面白いのが、『日刊スポーツ』というスポーツ紙まで

こういうことを取り上げております。全国の真言宗の僧侶の方が、これも若手でしょう。福島県相馬市で四十九日の法要をやったと。こういうことがニュースになるというのは、読み手も地元の方も注目しているし、何か心に響くものを感じているということだと思います。

実は、私は3月11日はイタリアにおりまして、本当は3月中ずっとベネチア大学で講義をする予定だったのですが、地元の方をお願いして、そのまま帰ってまいりました。何か帰らなければいけないという気が、どうしてもしましたね。

それはイタリアの方には迷惑を掛けることもあったのですが、しかし非常に快く応じてくれました。そして、その後も支援のメッセージをよく送ってくださったということがありました。そういうところは、何か宗教文化の占める場所がかなり大きいと私は感じた次第です。

宗教者災害支援連絡会というのを始めました。その4枚目のスライドのところに出ていると思うのですが、これは要するに、宗教の別、宗派の別を超えて、みんなで協力しようということから始めたわけです。

つまり、阪神大震災のときも宗教団体、宗教者はそれぞれ大いに活躍したわけです。しかし目立たなかった。目立たないということは、実際に活動する在り方も、ちょっと有効性に限界があったと。

その一つの大きな理由は、各宗派、各宗教団体がそれぞれにやっていた。というとは、仲間内を中心にやっていたということです。もちろん一般の方のためにやっても、なかなかそれが広く多くの方のために活動するには向かなかったという反省がありました。

それで、兵庫県立大学の岡田真美子先生という、日蓮宗のお寺の主婦でありますと同時に、非常に優れた現代仏教の社会活動についての研究をなさっている方です。その方やほかの方々と協力して。ですから、宗教研究者、仏教研究者の方々が最初に声を上げるという感じで、宗教界のさまざまな方たちに声を掛けて、宗教者災害支援連絡会というものを始めました。

その意味は、お互いに宗教、宗派で違うこともたくさんあるでしょう。しかし、それを超えてできることの方が大きいのではないだろうかということですね。いざというときには、自分の教えでなければ駄目だという、仏教固有のこれとか、何々宗これを、最後は阿弥陀仏とか、最後は禅でなければということもあるかもしれません。

そういうことが必要な方もあるでしょう。必要なときもあるでしょう。しかし、もっと広く多くの方に共に受け取ってもらえるようなところに、少し重きを置いた支援活動をしてはどうだろうかということでありました。

毎月、情報交換会というのをしております。それぞれの支援の活動のご報告をいただいております。東京でやっております。だいたい三つぐらいの領域を挙げております。

一つは、被災避難の受け入れです。今回の宗教団体の支援の一つの特徴は、とにかく逃げてくる人を受け入れる場所になったということです。避難場所というと、学校の体育館

とか、そういうところがすぐに出てくるわけですが、行政としては、そういうところをまず準備するでしょう。

しかし多くの住民が、まずお寺に、そして神社も、そういうふうに機能しました。物資の供給というような面では神社が非常に大きかった。これは、もともと宗教というものに、そういう働きがある。いざというときには人が逃げて行けるような場所だということがあったと思うのです。

それは、今度はまた原発の被害が広がっていきますと、福島の方は遠くへ逃げていかなければなりません。そういうときにも、宗教だからこそ受け入れに働けるのではないか。これが一つです。避難の受け入れ。

それから、被災地支援。これも、各宗教団体は非常に優れた支援活動の実績を持っている。しかしそれを横に、お互いの情報を通じて助け合うことによって、もっともっと大きな活動ができるのではないだろうか。それが第2点目です。

3番目は、心のケアということです。心のケアというと、まず国、行政、学者は、臨床心理士、精神科医というところが活動すべきだということになります。今日は、臨床心理の先生方と一緒におられますし、心理学と宗教関係が大いに協働できると思うのですが、どちらかと言うと、その行政的な考えでは、これは医学や心理学の世界だというふうに考えがちである。しかし、宗教が大いに本当は活躍できる場所ではないでしょうか。

しかし、一般の懸念として宗教が心のケアに入ってくるといいますけど、布教をしたり、自分たちの固有の教えを説いて、いわば仲間集めをしたりというふうになるのではないか。ですから、布教を目指すというのではないこういう場合、心のケアというのは、宗教集団としてはどういうふうになればできるのだろうか。これが大きい問題になるということです。

そこで私は宗教集団ではなく宗教文化というものを通して心のケアを考えてみたいのです。私が見るところでは、仏教の根本に悲しみということがある。ですので、心のケアというのは、もちろん普遍的な心理学の議論、あるいは精神医学の治療法に基づいてなされることもあるでしょう。

しかし多くの方々が心の底から癒やされるというか、あるいは悲しみというものを自らのこととして受け止め、それを超えていくというのは、どこかに文化の背景、宗教全般の背景というものがある。それを見いだしていくことが不可欠であろうと思っています。

そこへ行きますと、まず日本の伝統を広く見たい。それは単に仏教だけではなくて、ほかの宗教にも分け持たれているし、おそらく西洋のキリスト教とか、世界の諸宗教に分け持たれていると思いますが、取りあえず仏教を中心にして見ていきたいと思っています。

仏教のキーワードといえば、例えば無常というのがあります。無常というのは死と不可分であります。喪失、失うこと、その悲しみということが基本にある。あるいは慈悲ということですが、人のために何かしてあげる。思いやりをするということですが、そこに「悲しみ」という言葉が付いているというのが非常に重要なポイントだと思います。

例えばキリスト教でしたら、それは愛の行為と言えるでしょう。しかし、compassion です。つまり、共に苦しみ悲しむというのが仏教が言っていることです。そういうことは、日本人の気持ちの中には、ごく自然に入っていることではないかと。

例えば仏陀は、なぜ仏道修行に入ったのか。普通の仏教の説明を読んでいると、よく分かりません。しかし仏陀が、まず生まれたときにお母さんが亡くなったということが、おそらく多くの仏教徒にとっては頭の中にあっただのではないかと。実際、出家する多くの方は親が亡くなった。法然とか蓮如とか、多くの歴史上の僧侶もそうであります。そういうことを考えると、仏教の基底に悲しみの心情があるという見方ができるわけです。

「いろはにほへと」は、まさに無常の教えであります。それを通して悟りの道へ向かいましようということが書いてあります。「うゐのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせず」。夢の中にまどろんでいる人生から目覚めて、仏道修行に専念しようということなのです。

しかしそれは、この世から離れて修行の道にもっぱら向かうということのようではありますが、なかなかどうも日本の仏教はそうはならない。『白骨の御文』という、浄土真宗でよく読み上げられるような文書を見ましても、死のことをいつも意識して、そのことを基に阿弥陀仏への信心を起こしようということでもあります。

災害のことは後でまた述べるとして、私が述べたいと思うのは、いま日本の悲しみの伝統、仏教の伝統というのを、どうやって災害の中で生かしていくか。心のケアということが行われるにしても、何かそういう大きな文化的展望、われわれの宗教的自覚というものが背後になくはないだろう。そういうものを伝統の中に見ていきましょうということなのです。

悲しみを超えて、力を得ていく。日本人は、どういうふうにしてそれをやっていたのか。こういうたいへんな時にこそそういうものを見ていけたらいいなということで、これからはかなり私の私的な、私自身は例えばこういう人と共鳴するという例であります。

小林一茶という俳人があります。200年ぐらい前の方なのですが、この方は分かりやすい俳句を書いた。子どもにも分かるような俳句を書いたということで知られております。俗っぽい俳句。芭蕉のように旅に出て死を見つめながら、宇宙的な響きを俳句に映し出すというのに比べると、非常に卑近な生活の句をつくられた人ですが、実は一茶の句というのは悲しみに満ちているのであります。

彼は2歳でお母さんが亡くなりまして、継母が来ます。後妻がお父さんに来て、そのお母さんに子どもが生まれてしまった。おばあさんがずっと守ってくれたのですが、14歳のときにおばあさんが亡くなったので、江戸に出て奉公した。それから十何年帰ってきませんでした。長野の北の柏原というところの、中越地震と近い辺りです。新潟との境を接しているというようなところで、比較的豊かな農家だったのですが。

当時、江戸へ出てきますと、人口100万ぐらいあったのか、たいへんな都市であります。男が多いですね。何とか生きて延びていけないといけない。しかしみんな、そういう思い

で来て、あまり人口が増えない。男が多いという意味は結婚できない。長屋の中で辛うじて暮らしている。

この人は薬屋などの奉公をした後、俳句で身を立てていくのですが、それはパトロンを得て、なんとか競争に勝って少しでも番付の中で自分の名前を上げてという生活だったのです。ですので、そういう悲しい人生を生き抜いていった人だと思います。

こんなひがんでいるような句がたくさんある。「しょんぼりと雀にさへもまま子哉」、「なでしこや まゝはゝ木々の日陰花」。はは木というのは、何かほうき、そういう灌木で、ほうきみたいな葉っぱの生え方をしているというのですが、その前に「まま」を付けて、日陰花というのを「まゝはゝ木」という言葉と重ねたりしています。

「我と来て遊べや親のない雀」。次の句は40代になってつくったものなので、かなり洗練されたもの表現になっています。「亡母（なきはは）や 海見る度に見る度に」。

その上に彼は、最もよく知られた『おらが春』というのを書いております。これは、実は子どもが生まれて、その子どもが死んでしまったというのですが、継母と異母妹と彼は争いをして遺産相続します。そして柏原へ帰りまして、土地を小作に出して、ようやく安定した暮らしができるようになる。そして、地元の俳人を集めて俳句を楽しんでいたわけです。ある意味では、ようやく著名な俳人として余生を楽しむところまで這い上がってきた。

しかし、そこで結婚をしまして子どもが生まれるのですが、またその子が次々死んでいくということが起こりました。妻も、また亡くなっていく。あるいは、後妻が離婚する。

有名な『おらが春』は、2番目の最初の女の子であった、さとが亡くなった時の話です。疱瘡にかかって死んでしまった。その悲しさを歌っているものです。

「這え笑へ二つになるぞけふからは」。1歳ちょっとで死んでしまうのですが、これはお正月ですので、二つというのはまだ、生まれてから半年ぐらいのときです。生後6カ月ぐらいで、数えの2歳になるわけです。そのときにこんな、いかにも手放しで喜んでいるような句をつくっていたわけです。

ところが、その「千代の小松の、二葉ばかりの笑ひ盛りになる緑り子を」と。こんなにこれから命が見事に発展していく。松というと、さっきの鎌田さんの写真にも出てきましたが、生命力の印、長い命の印でもあります常緑樹。そういうふうになるはずの子どもが、疱瘡神に見舞われて、神送りを致します。この疱瘡神を、神にお祭して出ていってくださいということをしたにもかかわらず亡くなってしまった。

「母は死に顔にすがりて、よゝよゝと泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行水のふたゝび帰らず、散花の梢にもどらぬくいごとなどあきらめ顔しても、思ひ切りがたきは、恩愛のきづな也けり」。

仏教の建前と教えとしては、恩愛の絆というのを、それは有為の世界ですね。それを超えて向こう側へ行く。これが教えでしょう。悟りというものは、そういうものだということとなるでしょう。

しかし、そうは言えないよねと一茶はため息をつくわけです。「露の世は露の世ながらさりながら」。露の世というのは無常であるから、無常であることをつくづく悟ったならば、仏道の世界にすっかり入りましょう。しかしそういっても、この世に執着を持って、この世の絆の中で生きていくんだよという句です。

実は、一茶はかなり熱心な仏教徒でありました。真宗の門徒であったと思います。しかし、彼はどこか冷めてきて、おそらくお寺の説教どおりを信じる門徒ではなかった。これが「さりながら」というところに表れているし、この『おらが春』全体が仏道に強く深く引かれながら、それとは違う。だからこそ文芸を通して彼は自己を表現しているわけですね。文芸の中でこそ仏教の本来の精神が表現できる。それは彼にとっては、もしかしたら、今風に言えば宗教でなくてもよい、仏道でなくてもよかったのではないだろうか。そういうものとして話しています。

フィリップ・フォレストというのは現代のフランスの作家です。文芸研究者だったのですね。ところが作家になった。そして、日本文学がたいへん好きで『さりながら』という小説を書いた。その中には一茶や漱石が引かれているという作品なのですが、実は、この作家はお嬢さんが3歳のときに亡くなっている。そういうことがあって、つくづく一茶の作品を愛した人でありました。

さが亡くなって35日でお墓に行ったようです。「秋風やむしりたがりし赤い花」。たぶん今日みたいなすごい風が吹いたのではないのでしょうか。すると、その花をむしりたがるような風だというふうに。「露の玉つまんで見たるわらはかな」。本当に涙が出る。そして子どもの無心さというものが際立たされているものです。

この「来山」とか「落梧」というのは、当時の他の俳人です。ほかの俳人の俳句も『おらが春』の中に引かれております。来山という人も子どもが死んだのです。「愛子をうしなひて 春の夢気の違はぬがうらめしい」。

そういうことがあるでしょう。今度の災害でもあったでしょうし、さまざまな災害のときにも、せめて気が違ってくれたら、もう意識がなくなってしまうらという気持ちになる方がおられるのではないのでしょうか。

「子におくれたるころ 似た顔もあれば出て見ん人踊」。ちょっと子どもが通ったりすると、亡くなってしまった自分の子どものことが、ふっと思われて家の前の道に飛び出して確かめたくてしまう。こんな非常に印象的な句が引かれております。

実は、この間、柏原に行ってきたのです。一茶のお宅が残っております。一茶が死んだ土蔵が残っています。実は一茶は、そうやって次々に子どもが死んで、最後の奥さんは、子どもがはらんでいるときに本人が死んでしまった。ですので、自分の子どもが知らないままにいたのですが、その7代目の子孫の方がおられます。悲しみを乗り越えて次々子どもを作り、最後に子孫が残ったのです。

悲しみをたたえながら、たくましく生きたという俳人だったと思います。何かそういう精神というのは、今後復興の中でたびたび思い起こされることではないだろうかと思いま

す。

無常の思想は日本の文芸の中に深く流れているものですが、どっちかというとな感情的な、情緒的なセンチメンタルなものに陥りがちであると批判したのが、唐木順三という人です。戦後さほど時を経ぬ頃に『無常』という本を書いています。

それに対して、いやいや、そうでもないんだよと。そういうことはみんなよく分かった上でたくましく生きていた。それは江戸時代に特に広がってくる「浮き世」という観念に表れているのだという捉え方もできます。

これは、お坊さんで西洋哲学の専門家であった橋本峰雄先生が『「うき世」の思想』という本で実に印象的に書いております。浮き世というのは、最初は憂鬱の「憂」だったのです。その方が仏教の教理に合う。しかし浮かれるようになってきた。

つまり、すぐそこに死がある生をわれわれは生きているけれども、その中で楽しく浮かれて生きている。しかし、同時にそれは水の上を辛うじて浮いているような世を渡るといいますか、そういう危ういものなのだという意識が浮き世という言葉になる。そんなことが一茶の俳句の世界から思われることです。

いま申し上げたようなことは、われわれは伝統的な宗教や習俗によって悲しみを表現し、悲しみを受け止めてきたそのあり方を顧みているつもりです。しかし、だんだん伝統や習俗と距離が生じるようになってきた。ですので、この震災の前の時期に、こういうことが言われました。もう葬式は要らないという本が出て、よく売れたりしました。そういう中で、葬式仏教で仏教はずっと来たのだけど、それでいいのだろうかという議論が行われていたのですね。

圭室諦成先生という方は、1963年に『葬式仏教』という本を書いた。この方は曹洞宗のお寺の出身の、たいへん優れた歴史学者ですが、圭室先生が63年にこれを書いたころは、日本の仏教がお葬式の方へ流れてきたのは、やや仏教の本流を外れたものであった。しかし日本の仏教は、それをよりどころにして、新しい精神をそこに込めることによって、今後、本来の仏教精神を生かしていくべきだと論じていました。

それに対して、いま大阪の應典院で大変優れた宗教活動をしている秋田光彦さんの『葬式をしない寺』という本ですが。秋田さんは、もともと葬式をするお寺があって、その横にもう一つお寺を建てて、そこではいろいろな社会活動をしている。あるいは、市民、住民のエネルギーを集めるような活動をされています。葬式仏教とは異なるタイプの寺のあり方を実験していて、大いに注目されている。ですので、圭室先生が抱いていたような私たちでは、もううまくいかないんだなど、多くの人は感じている。

お寺には多くの宗派で御詠歌講というのがあります。東北のお寺は御詠歌講でたくさんの女性が入り込んでいたのですけれども、いまはそれもどんどん減ってきている。昔のようなお盆の情景も薄れてきています。死者とやりとりをするイタコの口寄せ、亡くなった方と共にいるということが、ごく普通にあった時代もありました。しかし、今、イタコの後継者は見出しにくいです。

最近の冠婚葬祭の本を見ますと、親子 3 人で墓参りしている絵が出て来ます。イタコの口寄せの代わりになっているかもしれないのは、グリーフ・カウンセリングというものです。悲しみを晴らす。死者と共にいるという感覚を取り戻すのに新しい文化が必要になっているということです。

死を迎える新しいやり方が編み出されています。ホスピスはその代表的な例です。イギリスで 1967 年に、ソンドース (Dame Cicely Mary Strode Saunders) という看護師だった人が医師になってホスピスを始めた。この精神の中には、キリスト教のチャプレン制だけでは、もう患者さんの要望に応えることができない。同時に、病気を治す医療では足りない。死を迎えるケアの施設が必要になってくる。医療に、そういう側面があるのだということ思い出しましょう。そして、それは超宗教でなくてはならない。そういう理念が背景にあります。

ところが、日本でこれをやろうと思うと、なかなかうまくいかない。キリスト教系のホスピスはたくさんあるけれど、日本の仏教もビハーラというのを唱えているけれども、なかなか増えていかない。この背景には、チャプレン制度というのが、日本では、どういうわけかできない。仏教系の病院というのもあまりない。

仏教は明治以降、困った人を助けるための活動を大変熱心にやってきたのです。にもかかわらず、それが現代に続いている。それは制度的にも問題があった。

いま、震災の支援活動をしていますと、行政が宗教者や宗教機関が関わろうとすると、待ったをかける場面が非常にある。それは、お国こそ全部取り仕切るといふ時代精神があったのです。それがこういうところにも響いていると思います。

もうやめなさいという合図が来ていますが、大好きな宮沢賢治、鎌田さんと私の共通のアイドル宮沢賢治について、ちょっとだけ話をして。私は、先ほどの一茶の精神と、もう一つ宮沢賢治の悲しみというものを思い出してみたいなと思っています。

宮沢賢治は、詩の作品を見ても、とにかく悲しみに取りつかれている。なんでそんなに悲しまなければいけないの。いま、われわれは引きこもってしまい、死を考えたりする若者と付き合っていることが多いですが、賢治にもそれに通じるところがある。なんでそんなに自分を苦しめ、悲しまなければならぬのだろう。あふれ出る悲しみと言っていいと思います。そういうものに彼も取りつかれていたと思います。

『春と修羅』。修羅というのは、いつも争っている存在です。で、水の底に沈んで、いつまでも晴れたものが見えない世界にいる。そういう存在であります。自分がそういうものだとして常に思っていた。誠に印象的な詩句ですが、修羅としての苦しみ。こういうのは、若者でエネルギーが余って、自分を責めてしまったのだなど、心理学的にはそういうことになるかもしれません。

しかしそれは、彼にとっては実は大いなる悲しみだったのだと捉えられると思います。というか、あなたの悲しみを大いなる悲しみとして、彼は表現し歌おうとしたというか。そして、それが多くの人の心に響くようなものにしようとした。それが、宮沢賢治という

人の現代的な意味ではないだろうか。

それはもちろん『法華経』の信仰ということにのっとなっているわけです。ですから、『法華経』的なものがしばしば現れてきますが、同時に、べつに『法華経』のことを知らなくても、自分が仏教だっと思わなくても分かるようなものとして、彼の物語や詩作品には大きな悲しみというものが描かれていると思います。

一茶のたくましい、したたかに生きる悲しみ、そして宮沢賢治の大いなる悲しみというようなものを背後に置きながら、さまざまな宗教者が、さまざまな場所で、非常に具体的に、実践的に行っている支援活動というものを日本の伝統の中に何とか根付かせ、現代的な表現を見いだしていくという方向性ができればいいと考えています。

そしてそれは、先ほどちょっと言いたかったことの一つですが、例えば私どもの集まりにはライフリンクという、自殺予防の活動をしておられる方たち運動です。特定の宗教にはよらないです。そういう方たちも参加しています。宗教だけで閉じるということも、まったく必要がないということです。

もちろん宗教だからこそできる大事なことがあると思います。例えば死者を慰霊するのに読経するということがどうしても必要だということがあるのですけれども、その両面をうまく活用しつつ、悲しみというものを超えていく。あるいは、新しいタイプの心のケアの文化というものを育てていくということが、大事なように思っています。

ごめんなさい、大変時間が超過してしまっ。これで終わらせていただきます。

(島藺進氏報告終了)

○鎌田 ありがとうございます。すみません、急がせてしまいました。本当は一人一人ゆっくりと報告していただきたいのですが、後の報告者のこともありますので、次に玄侑宗久さんに報告していただきます。玄侑さんは『中陰の花』で芥川賞を受賞、その後福島県三春町の福聚寺の住職を務めながら、現在、内閣の復興構想会議の委員もされています。よろしくお願いします。

基調報告

「福島県での被災状況と被災地支援の現状および復興構想会議の報告」僧侶・作家玄侑宗久

こんにちは。玄侑宗久です。資料もないですけど、暗くてよろしいですか。

私が仰せつかりましたのは、福島県の被災状況と被災地支援の状況および復興構想会議の報告、ということです。まず被災状況ということですが、よく分からないのです。情報が乱れていると言いますか、いったいどれほどの被害があるのかというのが、次々に発見されているという状況だと思います。また情報管制というのは明らかにあったわけであり

私は3月12日ぐらいから原発の動向を注目していたのですけれども、何しろ3月14日の夕方に2号機が爆発した後、15日の早暁、午前2時ぐらいからアメダスの風向きが消えるのです。見られなくなってしまう。原発施設の中にあるモニタリングの計器も、数字がなくなります。

16日になって、ようやく15日の分も数字を出してくるわけですがけれども、これが明らかに何分の1かにしてあったわけでありまして、いまなお隠していることもありますね。NHKTVが明かしてしまいましたけれども、3月21日、お彼岸真っ盛りのときに、関東にものすごい放射性物質が流れたということは、ほぼ明らかでありまして、いま静岡、神奈川辺りでお茶が駄目だと言っていますけれども、あの主な原因になったのは3月21日だろう、決して3月15日ではないと思われまます。

でも、この21日に起こったことについては、まだ東電も国も一切言及しておりません。ですから、何が起こったのかさえ、まだ明確ではない。例えば、いま福島県でウシの放射性セシウムが問題になっていますけれども、その原因が外に干してあった稲わらだというわけですが、宮城県から稲わらを買った業者のウシから、食べてはいけない量が出てきているわけですね。

宮城県にいつ飛んだのか。これも知らされていないはずですよ。ですから宮城県も、民間ではかなりモニタリングを進めていまして、仙台界限は大丈夫なのですが、浜通りから入った内陸部、栗原町あたりからちょっと内陸の方へ、放射能の非常に濃い部分が広がっている。

これは、おそらくあまり知られていないことでありまして、今後、実はこうだったというのが、どうかたちで、どの程度出てくるのか分からないということなので、福島県の被災状況というのは今は明確には申し上げられない、という現状であります。

つまり、情報価値がわれわれの中で暴落してしまったということでしょうね。情報というのは、もちろんいま流れているものの中で、われわれの内部にソフトがあるものだけを情報としてキャッチしているわけですから、地震、津波が起こってテレビの映像から流れてきたものというのは、ほとんど情報化できない圧倒的な情景だったのだらうと思います。

悲しみとか苦しみとか、自分の脳の中のソフトを探ってみても、そうした言葉のこれまでのイメージに該当しない映像がいっぱい噴出してきて、情報化できない苦しみというのを我々は初期に味わったわけです。その後は情報が、ダブルバインドで出されたせいで、その価値が暴落してしまったのだと思います。

ダブルバインドというのは、例えば、直ちに健康に影響を与えないと言い続けながら、いきなりハウレンソウ、原乳を全県出荷停止にしたことなどが典型的です。直ちに影響は与えませんがと繰り返し言うておいて、いきなり全県ですから。こういうことをされると、非常な不信があらゆる情報に対して芽生えます。

その状態は、その後も継続的に起こりました。例えば、国は年間20ミリシーベルトを超えた場合は計画的避難区域にするので、1カ月以内に逃げなさいと言ったわけですがけれど

も、その同じ数字で年間 20 ミリを下回れば、子どもたちも校庭で遊んでいいですよと言った。これはどう考えても、間がなさ過ぎでありまして、これもやっぱりダブルバインドだったと思います。

そういう意味で、情報価値というのが非常に暴落してしまって、「どうせ、また」という心情が福島県民には芽生えてきた。「どうせ、また」というのは最悪の状況ですね。人間が人間に接するときに「どうせ、また」というのは、もう何の期待もない状態だと思いますが、今やそういうことが起こっているような気がします。

ただ、被災地全体で申し上げますと、今回、東日本大震災が起こった地域というのは、島菌先生のお話にも出てきましたけれども、御詠歌が盛んであったりイタコがいたり、宗教心という意味では、非常に強いエリアに起こった。このことによって、人々のつながりというものが日本社会の中で再確認されるかたちになったのではないかと。

避難所で肅々と並んで待っている人たち。あれはやっぱり日本における宗教心の現れだろうと思うのです。今回の被災地は、コミュニティーがまだ力を持っている地域でありまして、例えば義援金が出たら何に使いますかと訊かれて、お葬式をしたいと答えるわけです。津波で奪われたものの中で何を返してもらいたいですかと訊きますと、まず位牌と言うのですね。

全国的に見れば、むしろ日本はこういう地域ばかりではありません。しかしそういう地域で今回のことが起こったということで、非常にクリアに見えてきたものがあるのではないかと。

もともとこの国は火山列島でありまして、鎌田先生のご専門でしょうけれども、火山列島固有の神として、オオナムチという神様がいます。オオナムチというのは、大穴持ちの省略形ですね。ですから、もともと大きな噴火口を持った火山です。鳥取県の大山から出雲にやってきて国づくりに参加しますけれども、その後、阿蘇にも現れて、やっぱり阿蘇の噴火のときには、あっちにいるわけですね。

我が国は、いろいろな神々が外国からも入ってきた国ですが、日本の固有神として、やっぱり火山の神というのが明らかにいます。そういう意味では、当然、地震も津波も発生するものとして怖がられていたわけですし、怖いから、なだめるために祭るといって、日本の神道の基本的スタイルができたのだと思います。

先ほど鎌田先生の方から浪分神社のご紹介がありましたけれども、いわき市には津波神社という、そのものずばりの神社もあります。特に浜通りというところは神社が多いところでありまして、やっぱり海の脅威を、恵もいただきたいけれども、だからこそ祭る、という思想が定着しています。そういうかたちで、どんどん祭られてきたのだらうと思うのです。

福島県の、今回あまり近づきたがらない浜通り地方に、神社が約 300 あります。宮城と岩手を合わせた数は私の方ではちょっと分かりかねますが、とにかく浜通りというのは神社が多い。そのエリアには日本海側みたいに活火山は多くないのです。ですから、皆が祭

ったのは、むしろ海そのものの脅威だったのだらうと思います。

基本的には脅威ですが、それでも恵をいただきたいものが神になるとすれば、本当はウランもプルトニウムも神になってよかったのです。日本では、まだウラン大明神もプルトニウム神社もない。つまり、怖いということを認めなかったのが、日本型の、怖いけれど恵を願うという伝統的スタイルの中にはまっぴりはいなかった。ごまかしていたという感じがしております。

神道の方でも、鎌田先生が発表されているように、清まるべき自然が放射能で汚されてしまったという大きなダメージを受けたわけであります。これは本当に賠償問題だと思えます。神道の基盤を国の事業でぶち壊したわけで、これをどうしてくれるのかということ、を、本当は言ってもいいのではないかと思うのです。

でも宗教者は、はっきり言って、あまり訴訟が好きではない。そういうことに自分の日常をつぎ込みたくないのでしょうね。結局は何でも自分の「行」にしてしまうというところがありますから、そういう行動には出ていません（11月時点では、お寺が東電に賠償を求めるため、僧侶たちによる支援団体が3つできている）。

神道は神道で、以上のような打撃を受けたわけですけれども、仏教も、先ほど島菌先生のおっしゃった無常ということに、ものすごいダメージを受けているわけです。プルトニウム238、半減期は2万4千年ですか。無常ではないじゃないですか。プルトニウム244は半減期8千万年といいます。ですから、とうとう無常の原理に反するものが出てきてしまった。つまり、あまりに神道的でない、仏教的でもないというプラントが、全国各地に54カ所あるわけです。

無常といえますと、なんと言っても『方丈記』が浮かんできます。日本の中で無常観というものを、ある意味で結晶化させたというのが、私は鴨長明の『方丈記』ではなかろうかと思っています。幸いなことに、鴨長明という方は賀茂神社の系列の神官だった、鎌田先生の系統だったわけですけれども、後に出家して坊さんになりましたので、なんとなく神仏双方をカバーする方なんです。

その方が56歳ぐらいで『方丈記』を書いています。ですから、私とだいたい似たような年齢で書いているわけです。『徒然草』とか『枕草子』なんかと並べて紹介されることが多いわけですが、これはまったく違う本でありまして、他の2冊と違って実にテーマがはっきりしている。

とにかく自分の思うようにならない自然災害、および遷都という人災、それに対してどう対処したらいいのか、ということが書かれています。辻風とか、大地震とか、台風、飢饉、本当に当時のあらゆる災害体験が出てくるわけですけれども、無常なる周囲の出来事に対してどう対処するのかというのが、いまとは非常に違うわけです。

どうということかと申しますと、つまり、津波が来るので、それを防潮堤で防ぎましょうという考え方は、なかったわけですね。それだったら神社は要らないでしょう、ということになるんです。怖くない状態をつくってしまうわけですから、怖いから祭るという神道

の基本的スタイルにも反する。ですから、おびえを保つというのでしょうか。何とか復旧はしたけれども、やっぱり津波は怖いよねという、おびえを保っておかないといけないのだと思います。

震災後に『方丈記』を何回か読みまして、非常に印象深かったのは、金持ちは大枚をつぎ込んで、もうこれなら大丈夫という建物をつくるわけですけども、そういう人に限って、今回の被害のことは忘れてしまうと。口の端にも上らせなくなる、というようなことを鴨長明は書いております。

長明自身、最初は京都の太原の方に、庵（いおり）を30歳すぎで結びます。そのときに、もと住んでいた家の10分の1になったと書いています。その庵（いおり）にしばらく住んで、やがて50歳ぐらいになったときに、さらに今度は南の方の日野というところに再び庵（いおり）を結びます。そのときは前の庵（いおり）の100分の1になったと書いています。いったい最初は、どんな豪邸に住んでいたのかと思いますけれども……。

しかしそれだけ生活が縮小していけば、災害にやられても、べつに仮住まいだし、大して失うものはないですよという心境なのでしょう。庵には阿弥陀如来が祀ってあって、普賢菩薩が祀ってあって、『往生要集』が置いてあって、琵琶と琴が置いてある。そういう暮らしを、約五畳ほどのスペースで続けた。書いてあるものをすべて置くと、ちょっときついのではないかという気がしますが、家そのものも、どうやら組み立て式だったようです。組み立て式で可動式。ほとんどヤドカリ状態だった。

ヤドカリのことを実際に『方丈記』の中で書いていまして、「寄居」と書くんですね。福島県の郡山に寄居一家という暴力団がいるのですが、なかなかしゃれた名前だったわけですね。「寄居は小さき貝を好む」と言って、いざというときのためにヤドカリはなるべく小さい貝に住むというんです。それが「減災」の考え方なんですね。

そんなことを考えながら私は復興構想会議という場に、ひよんなことから選ばれて参加しました。75日間出席していたわけです。私としては福島県民でもあるわけですけども、一応宗教者でもありますから、宗教施設について特段の配慮が今回得られるようにと願っていました。復興構想というものの中に、どれだけ宗教施設に対する配慮が入れられるか、自分なりに努力したつもりなのですが、結果としては、文化財、祭り、芸能、そういったものの復旧、復興というものは、かなり手厚く盛り込めたし、また観光資源としての神社仏閣というのもきちっと扱えたと思いますが、それだけでは大部分の神社仏閣は救われない。地域文化の拠点としてのコミュニティー施設という言い方で結構なので、文化財と併記してもらえないかということ、再三というか、二度お願いをしたのですが、何が怖いのか、特段の反対はないのに、議長がつぶやいた「憲法違反」というような一言で、それが入れてもらえなかったという経緯があります。

特定の宗教を特別に支援しようというのではないわけですから、決して「憲法」違反ではないわけであります。そんな会議の期間中に、私は富山県で教誨師さんの集まりがあって、講演に呼ばれて出掛けたのですが、教誨師というのは、あらゆる宗教者の協力

を得てやっていることですよ。あるいは、保護司というのもそうです。そうやって国家に、法務省に、宗教者全体が協力しているわけです。それなのに、こういう災害の機会には何の援助も得られないのだからと、つくづく考えてしまいました。

正直申しまして、お寺、神社には壊滅的な状態になっているところもございます。全体として、宗派全部を含めると、ちょっと分からないですけども、例えば真言宗ですと、和尚さんが福島県で一人亡くなり、宮城県で3人亡くなった。住職死亡というのかなりあるのです。

あるいは、お寺がまったくなくなってしまった、津波で完全に山際まで押し流されてしまったというようなお寺が、石巻かいわいには5カ寺ぐらいあります。檀家さんも9割ほど流されているという中で、どうやって復興したらいいのだろう。今後、施設の再建が大きな問題になるだろうと思います。

国は、宗教施設ですから檀家さんでつくればいいでしょうという態度を取ります。しかし檀家さんも9割、やられています。例えば阪神大震災のときは、宗教施設に対する国からの援助というのは一切ありませんでした。そのため私の知り合いの神戸のお寺も、山門が倒れたのを復旧するだけで10年以上かかっています。

ただ、中越地震のときは、国のお金で作られた基金から、宗教施設に対する援助がなされています。ですから、その道はある程度開いているのですが、私は今回、公の復興提言の中にそのことを入れて欲しかったのです。しかし敵の壁もなかなか厚かった。しかも敵が誰だか分からないという状態でありました。

短い時間に何を申し上げたらいいのか困ってしまうのですが、いまの神社、仏閣、教会等の施設の復旧ということについては、一つ認識しておいていただきたいのは、例えば私が属する臨済宗妙心寺派は、福島県に1億円、宮城県に2億円、岩手県に1億5千万円、寄付しています（ほかにも茨城、千葉両県に2千5百万円ずつ）。その全額を、まったく全壊した同派のお寺だけに出していただければ復旧できるのです。

しかし本山は、被災された全ての皆さんへの援助を優先したわけです。ところが福島県に出した1億円から、福島県でやられている臨済宗の妙心寺派のお寺に果たして援助金が降りてくるだろうか。その道は、おそらく閉ざされています。

あるいは、天理教もそうです。天理教も、福島県に聞きますと億単位の寄付をされています。浄土真宗もされています。それを同宗派の個々のお寺によこすのではなくて、行政に寄付してしまった。だから、宗派によって違いますけれども、妙心寺派は本堂が全壊したというときに1千万円、庫裏も全壊していますと200万円加わる。ですから何にもなくなりましたというところに1千200万円寄こすわけです。しかし、それで何とかできるようか。

自分の寺の本山が、みんなのために寄付したことは素晴らしいし誇らしいわけですが、しかし、どうやらそのお金は末寺には廻ってきそうにない。私は今、ちょっと宗教と国というものの関係を、もう1回真剣に考えた方がいいのではないかという気がしております。

それが復興構想会議という場所での問題点といえば問題だったわけです。次に福島県のことに限ってお話しさせていただきます。半径 30 キロ、警戒地区および計画的避難区域に入るのですけれども、そこに福島県では約 60 カ寺あります。このお寺から、ほとんどの和尚さんが避難しています。お寺にいないわけです。ただ、皆無ではありません。残っている老僧もいます。

もちろんそうですね。20 キロ圏内にも、まだかなり残っている一般住民がいるわけです。「ご心配ありがとうございます。でも、私はここで死ぬから、どうぞお構いなく」と言う人を、首根っこをつかまえて追い出すわけにはいかないでしょう。

避難指示区域から警戒区域、というふうに名前を変えたとき、国としては、ある程度の強制力を持たせたかったのですけれども、それでも出ないと言う人は出ないのです。残ったまんまウシの世話をしていたり、寝たきりの家族を介護していたり、です。

そういう中ですから、30 キロまでの範囲に広げても、そこにお坊さんがいるというのは不思議ではないわけですが、70 歳を過ぎた和尚さんで残っている方がいます。境内が 2.2 μ Sv/h (毎時マイクロシーベルト)だそうなのですが、そのお寺をどうするのか。現状では、一般の住民に対する補償・賠償の問題はいろいろ出てきていますが、宗教施設が立ちゆかなくなったということに対する補償・賠償という話は、まだ出ていないと思います。

先ほどの神道の土台が汚されたということもそうですけれども、放射能で、そこにいらなくなった。そこにいられないという場合、鎌田先生のようにフリーランスの神主というは、ほとんどいないわけで、またフリーランスの住職というのは、ちょっと難しいわけがあります。

ですからいま、そこから逃れた和尚たちはアパート住まいをしながら、檀家さんの連絡先を一つずつ増やしている。もう散り散りばらばらで、46 都道府県に散らばってしまったわけです。ですから、市役所でさえ、ようやく 9 割方分かってきたという状況です。実際、一部は今でも、どこにいるのか分からない。

しかも居場所が分かったとしても、例えば新潟に逃げていった人の中で、そこに住んでいながら、その住人にならないと福祉のお世話になれない。これも非常に大きい。それから、公営住宅に入れない。入るためには、やっぱりそこに市民にならないといけない。ということは、避難していった場所に住民票を移してしまうということが起こっています（これはその後、総務省が飯舘村長の提案を受け容れ、いわば二重の住民票を認めたため、暫定的には解消されている）。

つまり、いま非常に深刻なこととしてあるのは、原発立地町村を中心にした近隣市町村の行政がメルトダウンしつつある、ということであります。個人への援助ということが、ある程度なされている中で、行政そのものへの援助というのは、まだ皆無です。ですから、幾つかの町が存続し続けられるのかどうか、それが今後の大きな問題になると思います。

それから、いま福島県で、もう一つの非常に大きな問題は、自殺の増加であります。宮城、岩手では、去年並みで横ばいです。けれども 5 月、6 月と、福島県では約 40 パーセン

ト増えています。これが、いったい何のせいなのかということを考えますと、まあ自殺というのは、私は原因も一概には決めつけられないと思うのですが、じつはある場所で見ただ不思議な装置のことを憶いだしてしまうんです。

ちょうど福島県のホットスポットに指定された伊達町に、子どもの科学館というところがあるのですが、そこにボタンを押すと自動的に竜巻が起こるとい装置があるのです。竜巻をどうやって起こすかという、四つの風を合わせてつくります。この角度がいろいろあるらしいのですけれども、とにかく一つのボタンを押すと四つの方向から風が吹いてきて、それが竜巻になるのです。

おそらく福島県民の自殺というのも、四つぐらいの風が合わさっているのではないかな。そんな気がするんです。リストラがあり、余震がいまでも続き、そして放射能への恐怖があります。個人的な事情のほかに、今は誰にでもすでに3つが揃っているわけです。しかも、何より大きいのは、放射能というのが、われわれの感覚にはまったく捉えられないものだということです。

つまり、われわれの目には今、イネが青々と育っているのです。モモもおいしそうに育っています。おいしそうだけではなく、食べれば、何ベクレルであってもおいしいのです。だから、器械で測らないと、ベクレルもシーベルトも分からないということです。私たちの感覚を素通りしているのです。

禅は、冷暖自治といいます。われわれは自分で確かめたい。しかし世界を自分で確かめ、それで生きていけばいいのだという世界観が、このシーベルトとベクレルには通じないのです。青々として見事に育って、そのイネを気持ちいい風が吹き抜けているけれども、イネは何ベクレル、風は何マイクロシーベルトという話なのです。

つまり放射能というのは、これまで営々と築き上げてきたわれわれの感覚では向き合えない世界なのです。われわれの感じるおいしさとか、気持ちよさとか、それを信じてはアカン、あの機械で測った数字の方を信じろというわけです。これは非常にダメージが大きいです。

もともと心の病がある人にとっては、生きてはいけないぐらいのダメージだと私は思います。この目や肌や、全ての感覚で感じることを信じるなど言うのです。それがおそらく、福島県で起こっている最大の悲劇だと思います。話が長引いてしまって、すみませんでした。

(玄侑宗久氏報告終了)

○鎌田 どうもありがとうございました。

福島県における大変深刻な事態。後のパネルディスカッションでもまた取り上げていきたいと思ひます。次に、稲場圭信さんに事例報告をお願いします。

事例報告

皆さん、こんにちは。稲場です。よろしく申し上げます。非常に引き込まれるような素晴らしい講演が続いた後で、大変やりづらいというか、まあリラックスしてお聞きいただければと思います。

私は阪神・淡路大震災のときは、ちょうど東京にしまして、島菌進先生の下で「現代宗教の社会倫理」ということに関心を持って研究していました。当時、兄が神戸の中央区にいましたので、何かできないかということで、当時はパソコン通信のニフティサーブというのが、ダイヤル回線アップでつないで。インターネットは、あまり普及していなかったのですが、情報をニフティサーブでいろいろと集めまして、六甲小学校にすぐに東京から駆け付けまして、子どものメンタルケアをしていました。

教育心理学の先生とかと何人かでやったわけですが、子どものメンタルケアという言葉は使っていましたが、やっていたことは、要は小学校で子どもたちと一緒に遊ぶということです。朝から晩まで遊ぶ。

いま私は「まるごとのケア」という言葉を使っていますけれども、心のケアとかメンタルケアとかという言葉はあっても、実際にやっているのは、丸ごと寄り添うというようなことをやっていました。

今回の地震の直後から、私もどうにか大阪から駆け付けてとは思ったのですが、やはりいろいろと仕事がある中で駆け付けられないと、悶々としていました。皆さんも、いろいろなところから情報を得て、いろいろな方が被災地に心を寄せて現場に駆け付ける。あるいは、世界各国から祈りを運ぶというようなことが報道されている。

そういった中であって、大阪の地から何ができるか。被災地に入って継続的に活動することができない中で、後方支援も何かできるのではないか。そういった中で立ち上げたのが宗教者災害救援ネットワーク。地震の二日後に立ち上げたわけです。

そもそもそういったことをやるという意味ですね。阪神・淡路大震災のときも、私は宗教と関係ないボランティアをしていたわけですが、実際に被災地でさまざまな宗教者が活動をしています。

私がかかわっていた避難所でも、とても普通のボランティアの人らが手を付けたくないような仮設所のトイレですね、用を足してすぐに出たいという汚さ。そこに宗教者の方が、黙々と目立たない清掃活動をされているのです。

どちらかというと、被災地に入ってボランティアをされると、やはり現場で被災された方と関わって何か心が通じ合って、相手からも喜ばれている、感謝をされたという思いを受けたいというのが、ボランティアとしてあると思うのですが、宗教者の方がまったく人を介さずに、誰が見ていようが見ていまいが構わずに大切なことをされている。そういったことが、いろいろなところにあります。

ただ、それが報道されない。世の中にも伝わらないという中で、今回は地震の直後から

メディアも社会も宗教者の動きを認識するだろう。その情報を集めて、また発信することが大事だと直感的に思ったのです。

それは、この15年の間に宗教者、宗教団体がNGOと連携しての活動をしたり、その間、中越地震とかいろいろな地震がある中で、各教団がそういった災害ボランティアの仕組みというものを育てて、また、反貧困の取り組みとかの中で宗教者の活動といったものが、またメディアでも少しずつ取り上げられつつある。「社会参加仏教」とかといった言葉もありますけれども、時代が少しずつ変わってきたということがある。

そこで、とにかく情報を集めようということではじめました。ここでキュレーションという言葉が挙げていますけれども、私が取り組んだのは、まさにこういったことですね。

フェイスブックというインターネットの無料のソーシャル・ネットワーキング・サービスですけれども、これにさまざまな宗教者の活動、ここにはインターネット上の新聞報道とか、あるいは各宗教者、宗教団体が現地で活動している情報、メールとかツイッターで送られてくるものを含めて、どんどんアップしていくということをやりました。

また、これはネット上の情報収集の活動ですけれども、これをやることによって実際に現地で活動している人、あるいは現地に入ろうという人も、この情報を見ながら、また自分の活動というものが全国で見られる。そしてバックアップされて、心の支えにもなっているという話を聞いたりします。

どんなカテゴリーがあるかと言うと、宗教団体の被害状況、心のケア、被災者の受け入れとか、祈りについてという宗教者らしい活動も含めて、さまざまな活動をトータルにフォローする。地震から二日後に立ち上げて、十日間で10万アクセス以上です。フェイスブック上にアカウントを持っていない人も、グーグルとかいろいろな検索でここに飛んでくることができるので、そういったやり方で見られる方もいます。

それと同時に、地震の1週間後に宗教者災害救援マップというのを、國學院大学の黒崎さんと、いろいろな方々の協力で立ち上げました。

被災地でももちろん全壊した、流出した神社、いろいろな宗教施設がありますけれども、高台にあるお寺とか神社、宗教施設が震災の直後に500名とか千人とか避難されてきた方々を受け入れているとか、そういった情報がいろいろなところからどんどん上がってきました。

その情報を、学生ボランティアにも協力してもらいまして、救援活動の拠点とか、被災者を受け入れている情報とかを入れていきました。例えば、白は被災者を主に受け入れているところです。これは私も、ようやく落ち着いたところに少しずつ現地に入って、状況を確認するような作業を進められるようになりました。ここも私が訪問しましたけれども、妙心寺派のお寺です。4月30日の段階で41名、6月1日に26名とか、こういうふうな被災者を受け入れて、どういう状況にあるかといったことをマップ上にどんどん入れていきました。

これがどう機能するかですけれども、例えばNGOとかNPOとか、いろいろな団体が

被災地に入る。こういったときに、この近くに、お寺とか神社で拠点になりそうな場所はあるのか。連携するようなプラットフォームですね。そういったことを考えています。

また今後、来週も、ここに今日いる帝京大学の濱田陽さんとか、私のところの大学院生と共に被災地の宗教施設での救援活動、状況というものを調査して、マップ上に挙げて、全国にこういったものを広げていくことによって、いざというときの連携、パートナーシップをまたつくれるのでないか。

それはどういうことか言うと、ここに「宗教の力」と挙げましたけれども、先ほど玄侑さんの方から、浜通りには神社が 300 あるという話がありました。日本全国に崇敬神社と氏子神社ですね。氏子さんが主に運営しているような、宮司さんがいないような神社も含めて 8 万 5 千ある。被災地 3 県で約 4 千 800 ぐらいありますね。

お寺の方はといいますと、全国で 7 万 8 千ですけれども、3 県では、ほとんどは曹洞宗で千 300 ですね。ほかの宗派を合わせて 3 千。これだけ、もちろん被災している、全壊とか流出しているものがありますけれども、ここに備蓄米とか水とかいろいろなものを置くことによって、いざというときに連携できる。キリスト教、新宗教も合わせて 18 万を超える宗教法人です。これはコンビニの 4 倍、公民館の 9 倍とか。

こういったものを、先ほどのマップ上で連携させることによって、例えば同じ地域でのお寺、神社で半年ごとに備蓄米の消費期限をずらせば、それが消費期限を切ったら、例えば生活保護を受けている人、フードバンクとかに回すことによって、また新たなものを購入していく。ここに行政、自治体の予算を使って連携してもいいのではないかな。そんなことも将来的にできればなと思って、いま情報収集をしています。

ちょっと話を変えます。先ほど、「心のケア」「まるごとのケア」という話をしましたがけれども、私のいる大阪大学の総長がこんなことを言っています。「ことばを受け止めるにアースが必要だ」と。話す側と聞く側で、被災地に入って、まともに全部を聞いて、例えば傾聴ボランティアとか心のケアで、被災されている方のお話を聞いて、同じに「大変ですね」という中に丸ごと返してしまうと、かえって相手に負担になってしまう。あるいは、自分がもたない。そういった中で鷺田さんは、アースが必要だと。

ここに私は、もし宗教者が被災地でケアに関わったときには、そこに神や仏というものが、この三角印ですね。聞く側と、まさにその苦に寄り添うわけですけれども、その全部を受け止め自分が苦しむというよりは、やはりどこかで神や仏に、またつなげていく。つなげているという安心感が、また話している方にもつながっていくのだと、考えています。

「心のケアから、まるごとのケア」と書いてありますけれども、被災地で活動されている宗教者、被災地に現地入りした宗教者の話もいろいろ聞いたり、また現地でもお伺いしました。そういった中で、もちろん心のケアも考えているけれども、要は現地に行っ一緒に食べ物をつくって、そこに身を寄せるということがケアにつながっている。

私の知っているお坊さんの方々の中には、数日、北海道から入って、また北海道に戻るわけですね。戻るときに被災者の方と抱き合っ、本当に「いつ、また来てくれる」と涙

ながらに。またしばらくして現地入りすると、「よく来てくれた」と。そういった本当に家族のような付き合いをされているお坊さんの方もいる。その方々は、まさにまるごとのケアをしているのではないか。

さまざまな縁を失った人たちの生きる歩みの伴奏者ということで、1回きりではなく、一度関わったら、それが縁でずっと続けていく。そこにさまざまな専門家も含めた連携というのが大事になる。

私が阪神・淡路大震災のときに子どものケアをしたときに、東京から何度も行き、1カ月、2カ月、3カ月たったころに、いつボランティアを撤退するのだと。撤退論がすごいミーティングで行われるわけですね。で、撤退しました。いま思えば、しまったと。一度関わったら撤退する必要はない。

よく、自立のためにはボランティアは引かなければいけないという議論になるのです。でも、一度関わったら引かなくてもいい。関係を大切に、例えば現場にずっといられなくても、自分の都道府県に戻っても、そこから手紙のやりとりとか、それが10年、20年も続いてもいいのではないか。それが、ひいては子どもたち、あるいは大人もそうですけれども、こんなに遠くから自分のことを時折気に掛けてくれている人がいる。これは大きな心のケア、まるごとケアになる。

もう一つ、例えば日本は無宗教の国と呼ばれています。特定の信仰を持っている人は二十何パーセントとか、大多数、マジョリティーは無宗教です。そういった中で、私は無自覚の宗教性ということを最近言っています。

毎週教会に行っていない、どここの教団に属していないといっても、日本人の中には、無自覚に漠然と抱く、自己を超えたものとのつながりの感覚とか、先祖、神仏、世間に対しておかげさま、お互いさまといった念が、いまだに強いのではないか。これは、自分自身の宗教とは思っていないけれども、こういう感覚です。こういった思いが、いざという災害時とか非日常に、自分の心の中にふつふつと湧いてくる。それがまたボランティア活動の原動力になっている場合もあるのだと。

阪大の社会学の院生の三谷はるよさんという人が計量分析で、日本人のボランティアと意識について研究しています。非常に重要な研究をされていると思います。その中で、教育とか学歴、あるいは社会階層、経済力とボランティアという相関よりも、こういった宗教的なものを重要視するといった感覚とボランティアの相関というのが圧倒的に強いと、計量分析で明らかになった。これは今後、論文となってくるので、また関心を持って見ていてください。

そういった中でいま、支え合う社会という動きが、この20年ぐらい世界ではそうだけれども、日本の中にも出てきている。それは、いままでお上に任せておけば全ていくという時代があったわけですけれども、戦後、高度経済成長期、官僚主導でいい時代があった。

でもいまは、さまざまな複雑な問題がある中で、行政、お上に任しておけばいいという時代は終わった。これは地震の前からですね。年金の問題、医療の問題、福祉の問題とい

った中で、先ほどの無自覚の宗教性、つながりの感覚ですね。目に見えない放射能に、いまおびえているわれわれ、特に福島の方はそうだと思います。

そういった中で目に見えないつながりといったものを大切にしようという意識も出てくる。また、自発的な利他的精神も富む市民社会からつくっていかう。これはNPOの数が少しずつ増えて、また市民活動というものが活発になっている時代。

いま、私は大学に勤めていますけれども、大学も大きく変わりつつあります。現代社会の問題が本当にいろいろあって、全てがつながりを持っている。一国で解決できる問題ではない。学際的研究というのは昔からいわれていました。そういった中で、社会的実践というのも大事だと。これを融合させた社会貢献というのが、いま大学でも当たり前のよう

に求められている。研究室に閉じこもっているだけでは駄目だという時代になっている。最後にまとめです。まずソーシャル・メディア、先ほどのフェイスブックを使った後方支援の輪というものが、一つ今回の大きな特徴としてある。また、18万の宗教法人がいろいろなところと連携すれば大きな社会的力になる。無自覚の宗教性というものが、また支援の輪の原動力となる。

それから、「まるごとのケア」という関わり方です。もちろん専門家による心のケアというのも大事。また、学際的な研究・実践から支え合う社会の構築といったことが、いま必要とされている時代なのだと。ちょうど時間でしょうかね。ありがとうございました。

(稲場圭信氏報告終了)

○鎌田 ありがとうございました。次に第1部の最後の報告者、金子昭さんの事例報告をお願いします。

事例報告

「新宗教の災害支援活動の事例と課題」天理大学教授 金子昭

はじめに

ご紹介いただきました天理大学の金子と申します。私は、支援のまちネットワークというグループを大阪でやっております。

もともと、震災が起こる前は無縁社会ということがさかんに言われておりました。無縁社会の中で最も無縁な部分というと、これは家のない、身寄りのない人たちが中心の、大阪の釜ヶ崎という日雇い労働者のまちがありますけれども、そこで人知れず活動している宗教者たちのグループがあります。そういったグループが自然発生的に集まって、それが支援のまちネットというかたちになって、いま私は形ばかりですが事務局長をやっています。

今日のお話は、与えられたテーマの新宗教の災害支援活動の事例と課題について、三つの事柄を中心にしてお話をしていきたいと思います。

一つは、私のテーマは、宗教の中の新宗教というところにポイントを入れて、玄侑先生がお話しされた伝統宗教とどう違うか、ということです。新宗教というのは一般名称ですので、やはり特定の宗教の話をもっと具体的にしないとよく分からないと思います。そこで二点目としては、たまたま私自身が天理大学に勤めており、信仰も天理教ということなので、天理教の災害救援活動の話をしてします。そして三つ目としては、こころの未来研究センターという場をお借りしてのお話ですので、新宗教が、心のケアとどう関わるのか。この3点でお話をまとめていきたいと思っています。

活動に見る伝統宗教と新宗教の相違

まず第一点目です。新宗教の話をする前に、日本社会の中で、そもそも宗教というものが非常に周縁化されている。周縁化された中であって、さらに新宗教はもっと周縁化されている。島菌先生の小林一茶の話の話を聞きましたけれども、一般メディアの扱いにしても、何か継ぎ扱いの、さらに継ぎになっているような気もするくらいです。

新宗教による今回の災害の救援が、あまり注目されていないように見えます。なぜか。二つの原因があります。一つは、ちょっと言葉はきつかったかもしれませんが、一般メディアが新宗教のことを報道してくれないということなのです。教団の宣伝になるようなことは宣伝しない。けれども、マイナス面があれば積極的に報道をしてくれるので、人々には悪印象ばかり残るわけです。

今回の東日本大震災のときも、宗教がまったくスルーされた報道がありました。一つ例を挙げます。3月20日、石巻市で九日ぶりに救出された80歳のおばあさんと16歳の孫の高校生がいました。どの全国紙でも1面トップに出たニュースなのですが、この方は、ある新宗教の非常に熱心な、特におばあさんの方が信者さんだったのです。そのことについては、どのメディアもまったく触れませんでした。

私は、その新宗教の教団紙で、その1カ月後に詳しく報道されたので、それで知っているわけです。その方が九日間生き延びた背景には、必ず自分たちは助かるという信仰信念がありました。この信仰信念というものの触れて、一般メディアの方も報道していたら、きっと受ける人たちも違った印象を持ったかもしれないと思いました。

もう一つ、これは一般の方が新宗教全体に対して持っている一種の警戒感です。新宗教の信者がその看板を背負ってたすけに来てくれたといっても、受ける側に布教・伝道されるのではないかという心配が発生してしまうのです。私も宗教者災害支援連絡会、心のケアの担当部会の司会をさせていただいたこともあるのですが、実際にそうした例も発生しております。ある避難所では、「心のケア、お断り」という張り紙も出されたという話も聞きました。

渡邊太さんという若い研究者がまとめた報告によれば、宗教者が被災地でボランティア活動を行うことに関しては肯定的意見が大半である。ところが、だんだん宗教色の強い活動になっていくと肯定的意見が減り、逆に否定的意見が増えていきます。宗教が被災地で布教・伝統するという事は、もう否定的意見が大半になってまいります。これから見て

も一般の方の宗教に対する目線というのが、よく分かるわけです。

そこで、宗教全般に言えることですが、特に新宗教の場合は宗教協力活動ということに力を入れて、それによってわれわれの活動は決して布教・伝道ではなくて、本当に純粋な気持ちで支援に来たんですよということで安心感を伝える。そういうことで一般ボランティアに溶け込んでいく形をとるケースがあります。

大きなところでは加盟教団は70教団の新宗連（新宗教団体連合会）がそうですし、世界各国に宗教協議会を持っているWCRP（世界宗教者平和会議）がそうです。こうしたところが宗教協力をしながらボランティア隊とか街頭募金活動を行っております。この二つの団体の中心的な教団は立正佼成会であります。ほかの教団も積極的に関わっておりますけれども、一番大きなところは立正佼成会です。

さて、伝統仏教と新宗教の出番の違いというものがあるとしたら、どこにあるでしょうか。

特に心のケアに関連していえば、伝統宗教や新宗教を問わず、どの宗教でも自分たちは宗教者なのだから、宗教者ならではの支援をしたいと、宗教者たちは思っております。

けれども、伝統仏教の場合は何百年も前から、その地域に、その場所にあって、周囲の人々になじんだ存在になっています。それが非常に強みになっています。従って、習俗に根差した葬祭支援が人々に抵抗なく受け入れられるわけです。そして、そこから心のケアの足掛かりも得やすい。一般メディアも安心して報道できます。ところが新宗教の場合は、その信者でない限り、そういうニーズがないということで、従って心のケアの足掛かりもないということになるわけです。

事例紹介：天理教の災害救援の状況

ここで第二点目に入ります。新宗教の事例を挙げてお話ししたいと思います。昨日、私のもとに創価学会のある副会長から創価学会の救援レポートが届きました。また、世界で最も最も大きな仏教NGOの慈済基金会というところから、大規模支援のレポートが届きました。こういったところをご紹介してもいいのですが、先ほど申しましたことと、関西という土地柄もありますので、天理教の話をさせていただきます。

天理教は1838年に立教しました。教祖は中山みき。現在は1万7千カ所の教会、教師が16万8千人、信者が公称ですけれども190万人います。東日本大震災に関しましては、①災害救援ひのきしん隊（災救隊）の活動、②信者施設の受け入れ、③その他という3点で、簡単にお話し致します。

まず第一に、災害救援ひのきしん隊ですが、47都道府県、および台湾に常設されておりました。本部と各教区が連携し合って出動しております。略して災救隊と呼んだりしているのですが、彼らは水色のヘルメット、作業上の制服を着用して出動するのが基本となっております。

ですから、テレビなどで、民間のボランティアががれきの撤去をしていますというテロップが流れたりする中に、まさに水色のヘルメットを着用し、作業服を着て活動している

その姿が天理教の災救隊なのです。私も何回か、そういう場面を見たことがあります。

出動1カ月間のデータを見ても、後方支援を含めて福島、宮城、岩手と、すでにそれぞれ活動しております。活動の拠点は非常に大きく展開しておりまして、7月10日現在、その災害救援ひのきしん隊本部に聞きましたら、114次隊、延べ1万8千188人が出動しています。

ちなみに阪神・淡路大震災のときには1万3千418人が出動しておりまして、もちろん延べではありますけれども、このときのボランティアが130万人といわれております。そうすると、130万の中の1万3千418人ですから、大体100人に一人が天理教の災救隊だったということになるわけです。もちろん、これは本部で公式に出している救援隊で、教内の有志の隊を含めると、もっと多くなるはずですよ。

第二に、信者施設の受け入れですが、天理市には主に天理教直属教会単位での信者詰所というのが200カ所ございます。信者が修養するための施設ですけれども、全部泊めると6万人ぐらいあります。食事、医療、学校、雇用相談と、それぞれきちっとインフラも整えて、ソフトも完備して、被災者の方をお呼びすることになりました。

天理教では震災被災者受け入れ対策室を設置しまして、ホームページにも、こういう感じで受け入れのご案内をいたしました。受け入れ人数が3千人、受け入れ期間が3月から9月の末までで、宿泊費と食費は9月末まで無料ということだったのですけれども。天理市内には、信者詰所が約200カ所ございます。

ところが、ふたを開けてみると非常に低調でした。7月14日時点での数字を天理教の担当部局に問い合わせましたところ、いま入っている方は12名、8世帯ですということでした。延べ人数にしても109名、46世帯でした。

どうして受け入れが低調だったのか。これは幾つか理由があるのですけれども、関西という土地柄もあって被災地から遠い。それから宗教施設であるということの抵抗感もある。そして、仮住まいとしての住みにくさもある。ちょうど避難所と仮設住宅の間みたいなものかもしれません。「帯に短し、たすきに長し」ですね。そういったところで、ちょっと使いにくかったのかもしれない。

三番目に、それ以外の活動ですけれども、先ほど稲場先生が若いころに心のケアをされたという話をされました。天理教も心のケア対策室を設置しまして、実際何ができるのかずいぶん内部で検討されたようです。これはやりようによっては非常に危険なことにもなりかねないので、結局、子供会というのが一番安全というか、それがよかろうということで、子供会チームを派遣しました。

それともう一つ、玄侑先生もおっしゃっていたのですけれども、確かに天理教も福島だけにとどまらず、東北3県にそれぞれ1億円を義援金として渡しました。けれども、義援金と同時に教内の助け合いの天理教被災教区・災救隊支援募金というのを、やはり二本立てでやっております。これは教会の復興とか、天理教の災救隊の支援金として活用しております。だいたい金額も同じぐらいで、3億円を超えるお金が出されております。そ

れ以外に、いろいろな活動も行われているということです。

新宗教による心のケアの可能性

3番目の話題に入ります。新宗教による心のケアの可能性ですけれども、これは二つの考え方があると思うのです。一つは、「心理のレベル」でとどめていくという考え方です。これは、震災体験があるとしますと、そこに心的外傷が起こる。そうすると、それを癒やさなければいけないということで心のケアが行われる。これはまったく心理学のレベルで行われるものです。ですから当然、精神科医とかカウンセラーの出番になってくるわけです。

ところが、大切な人を失ったりして、心の中にぽっかりと空洞ができる。これは意味の喪失でもあります。意味の問いまで深まるものであれば、そこに私は宗教者の出番があり得ると思うのです。

宗教者の心のケアといった場合、それは単なる心のケアというのにとどまらず、そこに魂のレベルをくっつけて「心魂のケア」、あるいはスピリチュアルケアと言ってもいいのではないかと思います。これはすでに臨床哲学とか看護の倫理の現場で解かれているグリーンケアとか、スピリチュアルケアの在り方を、被災地での心のケアに生かせるかもしれません。

関西においては、16年前に阪神・淡路大震災が起きましたけれども、まだ心の中でそれが過去のものになっていない、まだ終わっていない人がたくさんいます。自分の中で、まだそれが終わっていない。現在もなおスピリチュアルペインが続いている。そもそも、毎年慰霊祭が行われるということは、慰霊される亡くなった人への追悼という意味だけでなく、それと同時に、慰霊する側も、やっぱりペイン（心魂の苦痛）というのもあり、それを癒すという意味もあるわけですね。そうすると心のケアというものは、東日本大震災においては、これからではないかと思うわけです。

新宗教というのは、私は宗教者らしくない宗教者だと思います。普段は平服を着ているし、外見だけで宗教者とはそれとわからない。そして、実際、いわゆる聖職者というよりは、自分もまた一生活者としての視点を大切にするというところに特徴があります。このお互いに生活者であるということで、むしろ共感的な寄り添い支援ができると思うのです。

そして、当座の支援だけで終わってしまうのではなくて、そのあとも人生の伴走者として、ずっといろいろなかたちで共に歩いていくことができる。人間関係をさまざまなかたちで紡いでいく。文通になったり、実際に会ったり、いろいろなかたちで生活者としての同じ目線での交流をしていくわけです。

そういうことを考えてみると、いま避難所に行って何かをするだけが、心のケアというわけではないということが分かるわけです。むしろ出番は、これからではないかと思えます。そして、心のケアだけをやってもしょうがない。肩をもんだり、肉体仕事をしたり、一緒に汗を流していったり、さまざまなケアを組み合わせることに意味があると思います。

その場合も、やっぱり関係性ということが大切になりますから、地元で普段から関係性を築いてきたかが問われるわけですね。ここに伝統仏教の優位があって、新宗教はそうした地元での普段の関係性づくりについてもっと学んでいかなければいけないと思います。

被災地への関わり方再考

東日本大震災の被災地は主に東北地方です。関西人の私は地元ではない、別な地方の被災地に行くというかたちになります。そして、被災地の方からすると、私はよそから来た人間ということになるわけです。

その被災地は、玄侑先生のお話ではないのですけれども、非常に信仰心のあつい地域です。そうしたときに、被災地の人々の思いと救援サイドの認識のずれというのがどうしてもあるわけで、当然宗教者が行う場合にも、それが起こってくるでしょう。ですから、上から目線のお助け支援のようなものではなくて、まず謙虚に被災地から学ぶ姿勢が大切ではないかと思っています。

精神科医の野田正彰さんは、「傷ついた人こそ、自分を尊敬してほしいと思っている。ボランティアの真の仕事は、被災者一人一人の内に人間の尊厳を見いだすことである」と述べています。ここの「人間」ということを「宗教」に置き換えたらどうでしょうか。

私は今年の5月に、仙台の近くの名取市というところに行って、被災した神社を訪れました。そんなに大きな神社ではなかったのですけれども、まったく手付かずのひどい状態でした。そういう地元の宗教施設の被害状況のことを考えてみますと、「心」のケアを宗教者が行う場合は「宗教心」へのケアになってくるのではないか。それを土地の「宗教へのケア」として行うことでやるのはどうだろうか。そんなことを考えました。

何をしたらいいか。いろいろなことができると思うのですけれども、こうした宗教施設の、まず片付けをさせていただこう。清掃させていただこう。そうすれば、その土地の神様、仏様に働いていただくこともできる。そうすれば、その土地の人々も元気になり、町や村も土地の精霊あるいは靈魂によって復興するのではないかと思うのです。

外部から来た宗教者は、やっぱり外部の人間である。そういう意識を常に持つていく必要があると思うのです。まず被災地の神様、仏様に働いていただくような手助けをする活動が、私は宗教者のすべき大事な支援ではないだろうかと思っております。

稲場先生のお話で、宗教者には神仏というアースがあると言われました。アースという言い方も面白いですが、神仏という超越者は一種のスーパーバイザーだと思います。宗教者による心のケアがその底力を発揮できるときがあるとすると、この超越的スーパーバイザーがしっかりと働いてくれたときではないかと思っています。

熱心な宗教者が陥りやすいことなのですから、自分の力量でこうしてやったんだと慢心するということがあってはならない。その人ではなくて、その人の背後でしっかりと、その人が信仰する神仏が働いてくださったからにはほかならないわけです。

心のケアには、基本的な処方箋もあるかとは思いますが。その意味で、さまざまな心のケアのガイドラインが決められてくるわけです。しかし、万能の特効薬はないと思います。

そして、言葉で何かを説くということも大切かもしれませんが、とにかく相手のそばにいる。とにかく逃げないで、そこにいることが大切です。いずれは離れざるを得ないときがあったとしても、手紙とかメールとか、いろいろなかたちでつながりを保つということが大切です。

私は、そういう関わりを続ける中で、いつかはこの宗教の言葉がお互いの心の通うときが、いずれ熟してくると思います。これが今後の宗教的、心のケアの姿ではないだろうかと思うわけです。

以上、私の報告を終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

(金子昭氏報告終了)

○鎌田 ありがとうございました。

金子さんの報告の中で、私たちが非常に印象に残っている、9日間もおばあさんと一緒に閉じ込められていた16歳の少年が10日目に助けられた話がありました。非常に印象に残っているのは、その少年が「将来、何になりたいか」と訊かれたときに、「芸術家になりたい」と言っていたことです。

この少年が被災の体験をずっと持ち続けながら、どういう芸術家になっていくだろうかと、私は非常に関心を持つと同時に、感銘しました。そのとき、ああ、芸術には心の問題を丸ごと昇華させ、変容させていく力があるのではないかと思いました。宗教にもそういう力があると思っていますが、特に芸術が持つ力には宗教以上の広がり、境界なし、垣根なしの伝わり方があるので、あの少年の言葉は今も僕の中で非常に強くなり響いております。

さて、以上4人の、こころの未来研究センターの連携研究員の諸先生方の報告をお聞きしました。

前半の二つの基調報告というのは、主に伝統宗教、主に伝統仏教と社会との関わりが問題であったと思います。そこから何が今問題になってきているのか。どういうことが現実の問題として浮上してき、対処しなければならないのか。それが前半の方で話されました。

後半には、二人の事例報告の中から、現代の問題が浮かび上がりました。稲場さんのソーシャルキャピタル、社会資本や社会的貢献に関して、いったい現在、宗教はどう関わっているのか。そして、新宗教の場合、そこに關わるどういう事例があるのかが話されました。

神社神道とか仏教とかの伝統宗教の蔭に隠れがちであるけれども、特に天理教などは新宗教と言っても、伝統宗教と言ってもいいくらいの伝統があると思っていますが、そういう新宗教の活動が見えないとか、隠れがちであるけれども、そういうこともソーシャルキャピタルとして、社会貢献の問題として捉え、考えていかなければならない。そんなさまざまな問題点が出てきたと思います。

ここで、ちょっと時間が押しているので10分、休憩にさせていただきます。その後、ここ

ろの未来研究センターの河合俊雄さんと内田由紀子さんからそれぞれ 10 分ずつ指定討論をしてもらい、パネルディスカッションに移っていききたいと思います。それでは、ただいまより 10 分休憩します。

(休憩)

第二部 討議

指定討論者：河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授・臨床心理学）

内田由紀子（京都大学こころの未来研究センター准教授・文化心理学）

指定討論 1

○河合　いま紹介いただきました、こころの未来研究センターの河合俊雄です。私の方は専門が臨床心理学で、今回の震災に関しては、日本箱庭療法学会と日本ユング心理学会で合同の震災対策ワーキンググループというのを立ち上げて、私とそのワーキンググループの委員長をしています。仙台と石巻に、いままでのところ 3 回入って活動を開始しております。

指定討論を行う前に、自分がどういう活動をしているのかということも、ちょっとだけ触れておきたいと思います。小さな学会ですので、それこそ包括的なことはできないのです。そこで教員とか、医療関係者とか、ケアする人のケアということを重点的にやろうとしています。

それはどういうことかと言うと、先ほど稲場先生が言われた、話の「アースする」という部分にとっても関わってくると思います。いま被災地は研修会とかがとても多いのですね。みんな、それで疲弊しています。向こうに入って思うのは、ニーズとオファーのミスマッチということが、とても大きいのではないかなと思います。

物に関してもそうで、私は石巻の例を話しているのですが、一方では給食がコッペパンと牛乳しかないのに、新品のサッカーボールが 20 個ぐらい積んであるとか、生徒一人当たり 10 個の消しゴムが送られてくるとか、物にあふれかえっているのだけれども、何が一番欲しいのですかと言うと、「校舎が欲しいです」とかというふうに、ものすごいミスマッチが起こります。

それは心のケアに関しても同じだと思うのです。どの辺りが大事かなと言うと、やっぱり情報交換会というような言い方をしたりはしているのですが、ケアに関わっている人たちが聞いたり、また自ら語ったりする語りというのをどうアースしていくかという部分というのは、とても大事ではないかなと、一つは思っています。

それから、やっぱり子どものケアというので、スクールカウンセラーを直接派遣するというのを始めていまして、それも、一人の人がずっと同じところということ始めています。それも、先ほどの玄侑さんの話とかにもあったのですが、とても調整が難しいということで、その問題にも後で触れたいと思っています。

まず断らせていただかないといけないのですが、鎌田先生の方からは全員に1個ずつ質問をしろと言われていたのですが、それは無理なので、こういうことをディスカッションしてほしいという、私の観点からの希望をお伝えしたいと思います。

一つは、一方で無常とか悲しみとか、日本人のベースにあるものとか、稲場さんの話の中では、無自覚の宗教性ということも言われていて、そのつながりとかという部分は確かにある。

私は神戸の大震災の被災者で、震度7の地域にいたのですが、低層マンションに住んでいて、物は壊滅的に壊れましたが、建物自体の被害は「比較的少なかったです。5戸あるマンションの住人というのは普段は絶対顔を合わさないようにしています。朝、いま飛び出さないと電車に間に合わないと思って、ドアを出ようとしても、どこかのマンションで、ガタツとしたら、慌ててドアを閉めて、顔を合わさないようにするとか、そういうふうにしていました。

ところが震災直後では、どこで水が配られた、カップラーメン2個もらったから1個あげるとか、もう5戸しかない低層マンションの中で驚くべき助け合いです。あつという間に、湧いてくるように人とのつながりというのができてくる。これは日本人の何かベースにあるものだと思います。

それで、その後、近所で親しくなって温泉旅行に行ったり、新しい恋愛とかが生まれたりしたのかというと、そんなことは全然なくて。アメリカで、飛行機が遅れるときに恋愛が生まれるとかという統計はあるらしいですけども、われわれは少なくともそういうことはなくて、3、4カ月たつと、また昔のように一切の交渉はなくなります。

けれども地震の、もうそのクリティカルなときに、基層（ベース）にあるような日本人のつながりみたいなのが出てくる。それはすごいものだと思います。人々の温かさ、山口組も頑張っていましたけれども、すごいつながりが出てきます。今回の地震に対しても、そのことがかなり言えると思うのです。それが一つ、確かなことなのだ。

ただ、もう一つ、玄侑さんの話を聞いていて、私はとても共鳴したところがあるのですけれども、そういう世界観がひょっとすると今回壊れたのではないかとも思うのです。一方で、それは生きているのだけれども、その世界観が壊れてしまったのではないか。

玄侑さんが言われたように、津波に襲われたところには多くの神社があつて、幸をもたらす水への感謝と恐れが認められます。ところがわれわれは原発という全く原理の違う新しい神を無自覚にもう受け入れていたのだと。そしてその神をちゃんと迎え、感謝もしないうちに、いまはもう追放しようとしている。それは、とてもちぐはぐなことをしているのではないかと思います。そして原発を追い出したから、この世界観の変化というのは、もはや巻き戻すことができないのではないかなと少し思っています。

それはどういうことかと言うと、自然に帰るとか、そこへのつながりとかいうのをベースにした世界観ではないものが入ってきてしまったのではないか。そうすると、復興の場合でも、もちろん町をどうつくるかとか、どう堤防をつくるかということはあるのだと思

うのですけれども、宗教家とか宗教者の役割として、そういう世界観のレベルで、どう復興とかビジョンを提供できるかということは、とても大事だと思いました。

玄侑さんの言われた、そんな恐れなくなる町になってどうするのだというのに、とても共感しましたね。京都というまちは塀のない都市です。ヨーロッパ人からすると、びっくりすることなのですが。唯一、京都に塀をつくろうとしたばか者は豊臣秀吉で、お土居というのをつくろうとしたのですけれども、京都は何に対して守っているかと言うと、霊ですね。鬼門があつて、bad spirit、悪い霊が入ってこないように守っているのです。だから、その部分はとても大事なだけでも、逆に悪い霊というのが力を持つてくるのを知っています。

日本史の上田正昭さんの講演を聴いて感動したのですけれども、御霊会とかも霊を追い払うのではなくて、一般民衆は、悪霊でも何であろうが、それが来るというパワーをもらおうとしていたそうです。そのもたらすものと恐れの間方をちゃんと感じられるという世界観。それが、これまでの自然だけでないものというのは、やっぱり宗教者は考えてもらわないといけないのではないかなと私は思っています。

だから、この無常とか、日本の世界観の大事な部分と、ひょっとしてそれは変わってこざるを得ないのではないかと。その部分も、難しいことですが討論できればと思っています。

私みたいに心理療法をしていますと、そういう大きな物語には関わらない。たいていの人は関わらないですよ。被災者とか子どもとかが、どうしてよくなっていくかと言うと、小さな物語が出てくるとき。つまり、家族のもめごととか、いじめられるとか、そういう小さな物語を扱うことによって心のケアは成立していきます。だから、大きな物語から、どう小さな物語に回帰していくかという部分が、とてもケアとしては大事だと思うのです。

それで、私が3度、4度、訪問しています小学校で、たまたまですが、絵を描いていたのです。これが割と一般のプロセスだと思うのです。これはたまたま2月に描いた自由画、小学校1年生ですね。これが地震直後です。ぐちゃぐちゃです。注目してほしいのは、ストラクチャーが壊れるというところがとても印象的で、ある種サイコティックな状況になるの「ですよ。けども、6月になると元に戻ってくるのです。

人間の心とか子どもというのは、相当な可塑性を持っていると思います。ちゃんとそのリカバリーしてくるのです。ここで、また個人の物語になってくる。学校の先生が言われていましたが、「いやあ、しんどい子はいますよ。でも、そういうのは、もともとしんどい子で」と、そういう場合が圧倒的に多いです。

だから、ある時間というのはとても大事で、いま地震に遭ったショックみたいなものからは、みんなリカバリーしてくる。そして、その中でみんな、いまそろそろ悪夢を見始めることを語るようになってくる。

それも心理療法の中で立場が分かれるのだけど、悪夢を見たら、トラウマワークをしないといけないかと思う人がいるのだけど、私はそうは思わなくて、悪夢を見るようになって

たというのは、もう収まってきていることだと。語るというのは、わあ、これから扱わないといけないというサインでは必ずしもなくて、収まってきていることだと私は思います。

だから、何度も訪れている小学校の先生が、「このごろ地震の夢を見るんですよ」とか、初めて津波に遭った体験とかを最近語ってくれるように、語られるようになって、ああ、収まってきているのだなと私は思いました。

けれどもそういう個人の物語で解決する部分はいいのだけど、宗教者はやっぱり大きな物語を考えるべきではないかなと私は思っています。私の立場のような心理学をしている人も、小さな物語を扱うことも大事なのですが、同時に大きな物語を考えていく必要があるのではないかなと思います。

もう一つ、ディスカッションのポイントとして考えてほしいなと思うのは、公平性の問題です。玄侑さんが言われましたけど、億単位の寄付がなされているのだけど、それが全然回ってこない。公平でないから。人間の心って、なんて難しいのだろう。社会って、なんて難しいのだろうと思いました。

避難所でも、物が無いのですが、ひとたび物資が来ると、あの人がたくさん取ったとか、私が家に帰っている間に配られてしまったとか、ものすごくもめます。だから、そこが人の心の面白いところであり難しいところで、この公平性ということがものすごく難しいなと思います。

われわれの場合も、継続的なスクールカウンセラーの派遣ということをやろうとして、準備はできているし、もうコーディネートもできているのだけれども。それで、こういう準備ができていますから、文科省のスクールカウンセラーの派遣から予算を回してくださいと言うと、駄目ですと言われますね。それは公平でないからと。

文科省はどういうことをしているかと言うと、第1期、第2期で6週間、スクールカウンセラーを被災地に派遣しました。それは週替わりです。そんな6週間も行ける人はいませんから。週替わりで人が替わって、そんなことはすごく困るというふうに、かなり声も上がっているのです。

だから、われわれがせっかくそういうことをしても、いや、そんな1校だけには不公平だからできないということになります。この公平性って、どういうことなのだろうということも考えていきたいなと思っています。というか、私からの提案なのですが。

もう一つは、今回見ていると、福島の場合はとても特殊だなと思います。見えないやつをどう相手にするのか。心理学は、見えないものをもっぱら相手にしているのですけれども、妄想というのが、そこから生まれやすいし、とても危険な状況だと思います。

それから、こうやっていろいろな宗教を排除することによって、玄侑さんにご存じだと思うのですが、福島までカルト的なものが出てきていますよね。だから、むしろ、そういうことを排除すればするほど、人々のニーズはあるのでカルト的なものが生まれてしまう。やっぱりそこは宗教が絡むべきところではないかなと私は考えています。そういう見えないものと戦うと、そのときに宗教はどういうことができるのか。そういうこともディ

スカッションできればと思います。

それから、大きくまとめると、そのアースするということの大切さと、無常ということに加えての世界観の変化ということですね。すると、それを見えないものとか、生まれてくるカルト的なものとか、ちょっと考えていければと思います。

もっといろいろあるのですけれども、取りあえず時間が来てしまったので失礼します。

○鎌田 ありがとうございます。大きく、三つのポイントがあったと思います。第一に大きな物語と小さな物語の関係性の問題。第二に公共性・公平性の問題。第三に見えないものとの関係性の問題。では続いて、内田さん、お願いします。

指定討論 2

○内田 ころの未来研究センターの内田です。よろしくお願い致します。

今日は指定討論ということですが、大変素晴らしいお話の後で私がどのようにまとめていいのか、ちょっと力量不足で、なかなか一人一人の先生方に対する質問を挙げさせていただくのがとても難しかったので、提案というか、ディスカッションの幾つかの元になるようなものをご提供できればということで、お話しさせていただきたいと思います。

私の専門は文化心理学で、基本的には実験心理学的な手法で、心について研究を行ってきております。特に「文化」が付いているわけですから、日本文化なり、私たちが暮らす中での文化的な価値観であるとか、ものの考え方、社会的に共有しているような文化的な価値というもの、心の働きの関連について研究をしまりました。

文化心理学には、もちろんいろいろな研究があるのですけれども、いくつかの日本文化についての実証研究をご紹介します。

例えば、陰と陽というのを考えるということ。例えば、幸福というのは、とてもいい意味のように思われるかもしれませんが、一方で幸福の悪い側面というのを思い付くこともできると思います。例えば、幸せすぎると、かえって怖いということであるとか、ずっと運がいいことが続いていると、逆に何かを落としてしまいそうな不安になるといった感覚です。

逆に今不幸せというものは本当につらいことかもしれないけれども、そこから自分を向上させるきっかけにするというようにとらえ方もあります。幸せ、不幸せというものにしても非常に複層的で、ポジティブとネガティブ、陰と陽というのが内包するような価値観があるということが日本の心理傾向の特徴として示されてきました。

それから、やはりつながりを重視するということです。例えば、思いやりですね。「おかげさま」、「持ちつ持たれつ」という言葉がご発表の中にありました。思いを人にはせる。遠くにいても、ずっと思っているよという手紙を出す、メールを出すということは意味があるよという話があったと思うのですが、まさにそれは自分の思いを他者に沿わせたいという気持ちを持つこと。こういうつながりを重視することというのも、日本的な価値

観の中で育まれる心理傾向の中に表れてきたといわれています。

また、もう一つのつながりというのは、人間同士のつながりではなくて、ホリズムといわれるものです、万物が絡み合っているというような考え方です。例えば、ある原因と結果が1対1対応をするのではなくて、思いもよらないことと、全然別の結果というのが、ぐるぐる回ってつながっているという思考様式です。

自分の運命や行動は、自分一人で決められるものではなくて、さまざまな人の思惑、考えであるとか、偶然重なり合って絡み合っているのだという人生観が流布しているということがいわれています。

こういった日本文化の心というのは、集団主義であるとか相互協調性とかという言葉で文化心理学の中でも語られてきたわけですけれども、一方で、日本の近年の社会においては、非常に個人主義化が進んできたということも指摘されています。

例えば、自分個人の選択というのを重視したいという傾向があります。私だけの何かというのをもちたいという気持ちであるとか、しがらみというのはしんどいから自分一人でなんとか努力をしたいというような、個人主義的な価値観というのがグローバル化等様々な影響下の元、戦後広まってきたと指摘されています。

ところが震災後にどんなふうに意識が変化していったのか。たとえば先ほど河合先生がおっしゃったような、弱い紐帯が意識されるようになる。それまで顔は知っているけれども、お互いあいさつもしないという人たちについて強く意識し、そこに意味を持たせていくというようなことがある。

後でちょっとお見せしたいのですが、幸福感自身も変化するということがあります。つなぐとか、支えるとか、絆という言葉が震災後に多く耳にしたわけですけれども、こういったことが実際に見直されるようになったのではないかと思います。

本日は宗教というのがテーマになっているわけですが、宗教というのは特に、つなぐ、支えるという価値観を支える働きをし得るのではないかと思いますというのが、4人の先生方のお話を聞かせていただいて持った感想です。

電通総研が震災1カ月後の生活者意識をホームページで発表しています。「震災で目覚めた利他的遺伝子」という書き方がしてあります。例えば、「自分第一主義から家族回帰へ」、「当たり前から、ありがたみ・感謝へ」、「人工的な生活から、自然と調和した生活へ」、「自分の将来のためから、次世代の未来のために」というように、電通さんが実際にアンケート調査を全国の2千名の方々に行ったところ、つながりというものを意識したような回答が増えていたということを発表しています。

実際、私も内閣府の幸福感に関する研究会に入っているわけですが、そこで被災地以外の20代、30代の1万人以上の人たちが、いったいどんなふうに人生観を変化させたのかという調査を行いました。

やはりあれだけの圧倒的な津波の映像を見て、被災地にいる人でなくても、かなりショックを受けていて、実際、私も京大の学生なんかと話していると、本当に3月はずっと落

ち込んで、何もできませんというようなことが、あったわけです。

ところが、人生はまさに悪い意味での無常であり、何をやっても駄目だという虚無的・刹那的思考が増えたかという、そうではなかった。むしろ虚無的な考えを持つ方向への変化は小さく、むしろ一番大きく挙げられた変化というのは結び付きの重視でした。

もう一度自分の生活、当たり前だと思っていることを見直したいという人が増えていたのです。また震災前の12月と、震災直後の3月に幸福感を同じ人たちに聞くという調査も行っていました。12月の時点の幸せ感が、震災後にどのように変化をしたかを見ていたのですが、一つ大きく分かることというのは、まず地震が起こった後に幸福感が上がった人たちがいるということです。それはどういう人たちだったかという、震災後の幸福感の評定の時に、地震のことを思い浮かべた人たちでした。家族や知人に具体的に被災者がいないけれども、震災について思い浮かべたという人は4割ぐらいいました。思い浮かべた人というのは、どうやら震災前から少し幸せ感が高かった人たちでした。その人たちは、自分の現状をもう一度見直して、幸福の基準を変えていったと考えられます。いままで当たり前のように考えていた日常生活を見直して、自分の今ある幸福に対して感謝するという気持ちが芽生えたというふうに解説することができるわけです。しかし逆に半分ぐらいの若者たちは幸福感の判断の際に大震災についてほとんど考えもしなかったし、その人たちの幸福感は何も変わっていませんでした。

さて4名の先生方のお話をお伺いして、もしもご回答いただけるならうれしいなというようなポイントを挙げさせていただきます。

まず一つ目が、祈ること、祈られることです。無自覚な宗教性を人々は持っているように思います。具体的な宗教心に直結しなくても思わず祈るといったおとがあります。津波の映像を見ているときに、一人でも助かってほしいと思わず祈るといような、その祈りの気持ちです。いったい何に祈っているのか分からないけど、とにかく祈ってしまうというメンタリティーは、日本的な宗教観として、強くあるのではないかと思うわけです。

そのような宗教観の中で考えたときに、玄侑さんがおっしゃっておられた情報価値が暴落したということが気になりました。では精神的な価値が、いったいどういう意味を持つていくのか。

精神的・宗教的な価値よりも、情動的な価値、メディアで報道されるようなことや、統計的な何か、科学的に示された何かを、私たちは信じて暮らそうというようなことが近代社会の中で長くあったと思います。

そういうものが信じられなくなった中でも、人は、たぶん何かを信じようとはするのではないか。何かを信じたい。何かに自分の気持ちの寄りどころを見つけていきたい。自分の意見が本当に正しいのか、間違っているのかを知るために、いろいろなものを手だてにしなければならない。このような場面で宗教的なものが再浮上してくることがあるのでしょうか。

また、放射能のように目にも見えない、味わうこともできないものに対して、私たちは

非常にいろいろな反応をします。いま実はメディアの報道分析を行っていて、震災後の番組でどのようなことが報道されているのかということ进行分析しています。すると、非常に認知的な反応と感情的な感情が混在しているという感じがあります。

それはどういうことかと言ってしまうと、例えばセシウムは、科学的にみてかくかくしかじかの点で危ないですというように、人の認知機能、つまりは頭を使って考える情報を専門家などが提供するわけですが、その処理には時間がかかってしまいます。

そんな場面で、今度はキャスターやコメンテーターが感情的な反応を投げかける（たとえば「怖いですね」といったようなコメント）。これにはかなりすぐに反応してしまい、嫌だとか、怖いとか、拒絶したいという気持ちはずっと入り込んできます報道の中でもニュースキャスターの意見や、被災地の人たちの反応という中に、感情的な反応が多く、認知的な情報と混在して報道されているというようなことがあります。

放射能に関する事実を私たちは目で見ることができない。味わうこともできない。だけど、そこにある事実というものに対して、なんとか認知的に処理しようとする。一方で、感情的なところに引っ張られていって、そこでまた新たな事実がつけられていくというような流れが、メディアの提供するコンテンツの中にあります。

こういった中で宗教的な、あるいは精神的な支柱が、感情のぶれを制御するように働いてくれるのかどうかということについて、知りたいなと思っています。

あと、これは河合先生も先ほどおっしゃっていましたが、未来像、ビジョンをどう示すか。悲しみを背負うということも重要な一つの要素だと思うのですが、その後どうしていくか。

もしかすると、コミュニティというものとの関連というところから考えた方がいいかもしれない。稲場先生、金子先生のお話の中にあつた支援とか救援ということについて、弱い紐帯やラウンドマーク的な役割はもちろん、コミュニティ施設としての役割を宗教施設が果たするという事は重要だろうと思います。

その中で、「連携するとすごく社会的な力はあるのだ」というような話があつたと思うのですが、これはいったいどういうかたちで実現可能なのでしょうか。

宗教に対して抵抗感があるというお話もありましたけれど、いろいろなものにつながっていることによって、その抵抗感というのは軽減されていく部分があるのではと思います。が、実際にその連携はどのような形でできるのか。

これは実際的な問いですね。また、連携は来る者拒まず去る者追わず、なのか、それとも、もっと積極的に働きかけようとしているのかということも知りたいところなのです。

先ほど示しましたように、震災後に半分ぐらいの若者たちは、実際に被災者の知人がいなくても自分の価値観を変えたという人がいて、その人たちは自分の幸福の基準を見直すということをやっているわけです。一方で、半分ぐらいの人たちはそういう反応があまり見られませんでした。

これは若い人たちだけではなく、全体的に一つの流れとして、二極化する流れがあるよ

うに思います。あるものに強くコミットする人もいれば、全然関わらないという人たちがいる。こうした「関わらない」ところにまで積極的に働きかけて連携を模索するのかどうか。

あまりまとまりのないコメントで申し訳ないのですが、以上で終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

○鎌田 ありがとうございました。それでは早速、パネルディスカッションの方に移ります。

パネルディスカッション

○鎌田 冒頭の開催趣旨説明のところで私が話しましたけれど、阪神・淡路大震災と今回の東日本大震災の二つは、20世紀終わりの1990年代と21世紀初めの2010年代と大きくつながりながら、違う断層を見せていると思います。

神戸での地震というのは都市型の直下型の地震であった。神戸という一つの大都市を中心に被害があった。今回は、農村部や漁村部、広域にわたって大きな被害が沿岸部400～500キロも続いているわけです。そして、津波が加わり、さらに、原子力発電所の爆発による放射性物質の飛散とそれによる汚染という、三重苦の状況にあるという点で16年前の問題とは大きく異なります。

もう一つ、16年前の1995年3月20日には地下鉄サリン事件に発するオウム真理教事件があった。これもまた非常に大きい違いです。この事件によって、宗教や精神世界に対して危険なイメージが一挙に高まりました。日本や世界各地で宗教に対するイメージの転換点でもあったと思うのです。

阪神淡路大震災では「ボランティア元年」といわれたほど、ボランティア活動が活発になったのですが、宗教家の活動が見えないとか、宗教者の声が消えたというのは、あの時点でオウム真理教事件がかぶってきて、それに対する報道一色に変化したことも影響したと思っています。そして、このオウム真理教問題はまだ解決されていない。いまに至るも尾を引きずっていると思います。そして、宗教に対する社会的イメージも回復しないまま、ダメージを受けたまま現在につながっています。

しかし今回、東日本大震災の被災地で、民間信仰を含めて生活の場で宗教心や、宗教的行為、助け合いがいろいろな形で起こってき、実際に生きている。そういう、生きて動いている宗教性をベースにして、宗教的問題がポジティブな面でも浮かび上がってきています。その背景として、社会的危機、例えば自殺者3万人が十数年も続いているという状況があります。そういう点からも、宗教に対する、もう一つの違う観点や期待も社会的にあるのだと思います。

そういう中で、宗教自身、あるいは宗教教団がその大きな社会問題に対してまだまだ答

えきれていないし、整理しきれないさまざまな問題を含みながらも、しかしさまざまな宗教活動が動き始めている。今回、そういう、動き始めているということの生々しい現場の当事者的な側面や問題点をさまざまな観点から提示していただいたと思います。

それで、指定討論者からの全体的な質問、こういう問題点を討議してほしいということがありました。それをもう1回復習しておく、宗教が抱える大きい特色として救済とか、世界観とかに対して大きい物語を準備するということか、人間の生き方として、そういう物語を与える。あるいは、そういうものを支えにして生きていく力になるのかという問題。

そういう大きい物語が壊れたかもしれない中で、どういう未来のビジョンなり生き方を、宗教が提示していくことができるだろうか。そういう大きな復興支援の在り方があるのかどうか。これは非常に困難な問題ですが、私は、河合さんの問題提起を聞きながら、シシ神の死を思い出しました。

『もののけ姫』という宮崎駿のアニメーションの中で、森のヌシの神であるシシ神が殺されてしまいます。シシ神が亡くなって、しかしまた微妙に復活する。微妙に復活して、森が緑に戻っていきます。しかし、山犬に育てられたもののけ姫のサンは、シシ神が死んで森が返ってきてても、もう昔のあの森とは違っている。死んだものは、もう戻ってこない、という言い方をしていたと思うのです。

あの場面は忘れられない印象的なラストシーンでした。今回震災があったときに、私も神社神道の立場が1回壊れたと思ったのです。ある大きなものが壊れ倒れた。大きい伝統文化が壊れた。

その壊れたものを、どうやって回復し修復できるのか。かなり深刻な問題を突き付けられているというのが私の受け止め方で、それに対する答えは、私自身まだはっきりとしていない。そういう問題が一つあります。

それから、公平性。これは実際に社会のネットワークや、ある物資を送ったり伝えたりしていくときに非常に重要な問題にあると同時に、微妙な、さまざまな葛藤、確執というのを生み出す。これをどう考えるのか。

それから、見えないものとの対し方という、今回、福島原発問題が突きつけた見えないものに対していくということが、宗教の側からどういうなかたちで取り組みがあり得るのか。

それ以外にも多々問題はありますが、その辺、1点1点でなくても構いませんので、最初、島菌進さんから始めて、玄侑さん、稲場さん、金子さんという順番に、指定討論者が出してきた問題点に対して、考えていることを自由に語っていただきたいと思います。お願いします。

○島菌 稲場さんの絵にアースというのが出てきて、その後、ほかの方も言及されました。つまり、個々の方の悲しみ、苦しみを支えようとするときに、やはりそれをさらに支える大きな何かが必要だと。それが大きな物語と言えるのかもしれない。そして、それはかな

り宗教に関わるものだということだったと思います。私も本当にそういうふうに思います。

それで、宮沢賢治の話を出したのは、彼は常に、自分のやるせない悲しみを大いなる悲しみとして表現しようとしたというのか、そうすることで人と分かち合う道を求めたということだと思います。そういう試みが支援ということから生まれてきてほしいものだし。

ですので、それは個々の支援の場所でも、それぞれの悲しみを大いなる悲しみに、そして大いなる物語につなげようというのか、そういうことが起こっているのだし、そして遠くにいても、それに類する、私の場合、東京で連絡をしながら何かそういうことを求めているということではないかと思います。それは、時代の中で新しい宗教的なものを生かし、直していく道を求めていくということなのかなと思いました。

それから、見えないものということ、あるいは公平性というようなことに関わるかもしれませんが。まさに1995年は、オウム事件が起こったので、あの震災の影響よりもオウム事件の影響で、宗教というものに対する信頼が壊れたという感じが非常にあったと思うのですが、今回壊れたのは、国家とか学者とか権威あるものが頼りにならないということが、かなり共有されていると思います。

少なくとも放射能に関しては、みんな自分で判断しなければいけないので、どの専門家がどう言っている、すぐそのまま受け入れはしないし、政府が何を言っても、なかなか簡単には「うん」と言えない。だから、それはもう非常に辛い。ダブルバインドというふうに玄侑さんがおっしゃいましたけれども、辛いことなのですが、しかしそこにはポジティブな面もあるのではなからうかと。

この間、宗教は従来の役割を超えて、例えば路上生活者の支援とか無縁社会に対して立ち向かうということをやってきた。あるいは、個々の宗教集団を超えて社会の苦難と取り組むということをやってきたわけです。

それは、20世紀、21世紀を通して、ますます深刻になってきている、われわれそれぞれが孤立していくということ、それから、信頼を失っていくということに対する取り組みの道を見いだそうとしていたのだと考えると、今回の、その。

そもそも放射能について、こんなに情報が信頼できないというのは、私がだんだん分かってきたことですが、つまり核時代に核を管理する人たちは真実を言わないということなんです。それは原爆のときにそうだったし、それ以後ずっとそうなのです。

ということは、世界の権力体制が本当に住民、市民の求めているものには答えないということが、そこに典型的に表れているので、そういうところでこそ宗教の力が表れてくるはずなのだと、少なくとも私はそういうふうに思いたいと思います。

それは絆ということなのですが、弱い絆、紐帯を結ぶというようにおっしゃったと思いますが、現代の絆には、そういう面があると思います。いわゆるネットワークで、SNSとかツイッターとかというものが役立つ時代です。一見はかなく断片的に見えるものが、組み合わせあって有効に働く場合があり得るので、そういうものを育てていくということが、いま求められているのではないかなと。

宗教も協力するということに、何か組織をつかって協力するとかということは必ずしも必要ではなくて、いろいろなかたちでお互いが助け合っていくという姿勢を表し合うことが、弱い絆のつながりの芽をつかっていくというのですか、そういうことがあり得るのではないかと思います。

○鎌田 ありがとうございます。

今回壊れたものは国家と学者、というのは、なかなか当たっていると思います。それから、情報を操作する者というか、管理する者というか、支配する者というか、情報を提供する側というものに対する疑い、不信。いままでもいろいろな疑いがありましたけれども、これほど多角的多層的に信頼度が暴落したのも今回が初めてだった。

そういう中で、いま言われる弱いネットワークみたいなものから、もう少し大きいうねりのようなものが生じてきているという側面もあると思います。

では次に、玄侑さん、お話してください。

○玄侑 河合先生から、大きな物語と小さい物語という話があったのですが、大きな物語ということでは、これだけ大きなことが起こったのだから、パラダイムシフトが起こるべきであるという考えが起こると思います。そうすると、幸福感に変化がないという人たちは、いったいどう考えているのだろうと、幸福感が少しでも変わった人たちは、いら立ちを持って思うわけです。

それが進むと、オウムが持っていたハルマゲドンを待ち望むという考え方に行くと思うんですね。つまり、いま福島県人は、もう一発来ないかなという考えさえ抱いてしまうんですよ。

いや、福島県人と言ったらまずいですね。少なくとも、私のどこかにはその気持ちがありますね。

つまり、もう1発、南の方に来れば何もかもはっきりするでしょう。

いま、福島で3発ぐらい来た状態で、それでもあちこちの県知事選挙では、原発推進派が通っていくわけじゃないですか。そのことに対して、じつは報復したいという欲求を持つ人々がいる。

本当にそうなってしまうと、オウムのハルマゲドンなんですよ。だから、ここを用心しなければいけない。やっぱりみんな、報復だけは考えないでいくしかないと思います。

たしかに、大きな物語は必要なのですが、私は、それは宗教の教義とか、そういうことであるよりも、むしろ生活なのではないかと思います。今回、被災地で無意識の宗教性と呼ばれるようなかたちで発揮されているものというのは、私たちの生活そのものではないでしょうか。

あの地域の人たちの暮らしを見ると、おおむね一戸建てです。ほとんど全部、一戸建てに住んでいます。そして、庭があって、畑があって、防風林があって、それだけの土地、

屋敷を、自分のところで管理して、防風林の向こうに行かないと隣の家はないのです。だから、それだけ距離があるからこそ、隣の人と会ったら、お茶飲もうよという気持ちが自然に芽生えるんですね。それで10時とか3時とかに毎日のようにお茶を飲み合っているわけです。

都市生活を送っていたら、さっき河合先生の話にもありましたように、隣に住んでいる人も無視しないとやっていけないわけです。満員電車の中に大勢知り合いがいたら、やりきれないですよ。挨拶だけでも忙しくてしょうがない。

だから、都市に暮らすということは、そういう意味では非常に不自然な生活なんです。距離が近く、ほとんど肌が触れ合うような状態で、満員電車に乗りながら、べつに恋愛が芽生えるわけでもない。つまり見てないんですね。ですから都市には、非常に不自然に人間の欲求を押し込めているところがあると思うのです。

だから今回、東北で発揮されているのは、生活から来る力だと思うんです。人間とのつながりというのは、本来はつながりたいだけの距離を持って暮らせば、自然発生するんじゃないでしょうか。そんな気がします。もちろん、そこでは仏壇を大事にするとか、いわゆる慣習的な意味での宗教性、儀式性というか、それを大事にする面もあるとは思いますが。

それから、先ほどの駄目になったものというのは、本当にそう思います。専門家といわれる人たちですね。専門家って、こんなに飼い犬みたいなものだったのか。つまり餌をくれる方向しか向いていなかったということがはっきりしてしまいました。

ですから、学者の世界でも超楽観論と超悲観論しかなくて、まともに真っすぐに見て語れる人がいなくなった。それが専門家というものになってしまった。もう一度、人は再びジェネラルにならないといけないのではないかという感じが致しました。

公平性ということですが、赤十字の義援金もそうなのですけれども、公平にやらなくてはならないから、なかなか配れないというのは、あまりにも方便について無知すぎると思います。

例えば、一つのまんじゅうを兄弟で分けるときに、きっちり真ん中で切らなくてもいいわけですよ。例えば弟がとにかく左右同じになるように切って、次に兄貴が選べばいい。切る人と選ぶ人を変えれば問題ないし、トラブルは起こらないわけです。あるいは、余った分は仏様にという手もあるわけで、「公平」という架空の概念に振り回されているような気が致します。

それから、見えないものに対する脅威。これも本当に大きいのですけれども、いままで、まるで放射線量がゼロだったみたいにおびえまくっているんですね。しかし、申し上げておきますけれども、皆さんがおいしいと言って食べるバナナは1本で、だいたい40ベクレルです。放射性カリウムが入っております。これはなんでもない普通のバナナに入っているんですよ。

また、京都人はとりわけ食べているであろうコブ（昆布）、だしを取ったりするコブですね。これには1キログラム当たり約2千ベクレル入っていますので、皆さん十分に摂取

していらっしゃいます。だから、どう考えても、いままでの内部被曝だってゼロではないんですよ。

まずは普段食べていたものにどのくらい入っていたかを知り、冷静になってほしいんです。例えばニューヨークに1回行けば240マイクロシーベルトですよ。2往復でほぼ1ミリシーベルトです。そんなに怖がっていたらスチュワーデスさんなんかなれないでしょう。パイロットだって結婚もできないはずですよ。

そういう周辺情報、あるいは、原発以前からの在り方に関する情報というものをきっちり言ってくれれば、さっきの認知と感情が分離するというようなことが、もうちょっとなくて済むのではないかという気がいたします。

○鎌田 ありがとうございます。ではすぐに続いて、稲場さん、お願いします。

○稲場 3点ぐらいお答えしようかなと思います。

一つ、河合さんの方から、阪神・淡路大震災のときのつながり、マンションで急に支え合いができて、3カ月たったら、また元に戻ったという話がありました。日本人がつながりたいという感覚が、非常事態で起きるのかどうか。あるいは、文化を越えて人間に共通しているのかどうかということですが、すけれども。

アメリカでも、ニューオーリンズでカトリーナの大災害がありましたね。2005年に、あれは四十数万人が家を失ったというのですけれども。その当時も、被災地から離れたところのアメリカ人、20万人以上がインターネットで自分の家を提供するという声が上がったんですよ。

大災害とか、そういったことが起こったときには助け合いとか支え合いが起きる。それを「災害ユートピア」という言葉で表すことがありますけれども。阪神・淡路大震災でも今回でも、そういった支え合うことも。

その中で、先ほど河合さんの話で、3カ月で阪神淡路大震災のときは普通に戻ったと。まあ他人というかたちに戻ってしまったところもある。阪神淡路大震災のときにボランティアが、あれほど全国から駆け付けてボランティア元年といわれて、日本社会が変わるのではないかと。私も神戸で、そういうボランティアをしながら思ったけれども、結局変わらなかったわけです。

それから16年間、日本社会で何が起きたかと言うと、経済が悪いなかでリストラ、人を物をように次から次へと切っていく。そして、勝ち組、負け組で分断された社会になっていく。支え合っていく、つながるところか、ますます切れていく。そして、しまいには無縁社会という言葉で、まあ先ほど金子さんの話にもありましたけれども、そういった社会にまで突き進んでいったと。

何が、日本社会をそういうふうにしてしまったのか。変わると思ったのに。今回の東日本大震災で変わるのかどうかですね。私は価値観の転換というか、いまパラダイムシフト

というお話がありましたけれども、まあ変わるのではないかと考えているわけです。

それは、阪神・淡路大震災のときには、それまで一つの近代的価値観で、効率、利益重視でひた走った日本社会ですね。どこかで、これはおかしいとずっといわれて、心の時代ということが20年、30年いわれている中で、阪神・淡路大震災が起きた。変わると思ったのに変われなかった。

やはりそれぐらいに、われわれ日本人、現代人の中に効率利益重視、経済重視で走り続けるという価値観が、もうこびり付いているのだと。それを、地震が起きたからボランティアがあればほど駆け付けたと。

一気に変えようと思っても、それを変えた途端に、生きる意味の貧困とか、自分の生きがいは何なんだ。いままで生きてきた基盤は何だったのか。結局それをぬぐい去ることができずに、引きずったまま、ずるずると。新自由主義の時代で、つながりが失われるような時代になっていたのです。

ただ、今回は本当に原発の問題も含めて、大きく私は変わるのではないかなと、そういう希望を持ちながら見ているわけです。それは地縁、社縁、血縁というさまざま縁が、どんどん都市が中心ですけれども奪われていく。東北ではまだまだつながりが強い社会だということで、これも今回、被災地の協力、つながりというものもあると思いますが。日本全国レベルで考えると、やはり地縁、社縁、血縁といった縁がどんどん奪われていく。

そういった社会になって新たに、例えば今回の原発、目に見えない放射線におびえている。そして子どもが汚染された食品を食べたらどうなるのかと、お母さんたちが心配して、専門家の言葉を信用できずに、自分たちでインターネット上で情報収集して、お母さん同士で情報交換しているわけですね。

まったく縁のない人同士が、一つの問題に共感を持って、被災地でないところでもつながっている。こういった共感に基づく縁、「共感縁」と私は最近呼んでいるのですが、地縁、社縁、血縁が奪われていく社会だというのは、共感に基づく共感縁が、いま生まれつつあるのではないかと。しがらみがある地域の縁、それもいい面、悪い面はあるのです。でも、新たな時代、共感を基にした共感縁というつながりが、いまの時代を変えていくのではないかなと。

内田さんの方から、宗教やいろいろなものが連携して、どうやって本当に支え合うようなかたちが可能なのかというお話がありました。

ソーシャルキャピタル（社会関係資本）という、地域のつながりでの信頼、支え合いということが、この十数年いわれています。宗教を基盤にして、お寺や神社やそんなものができるのかということですが、

一つは、私は被災地であるお寺、これは岩手県の曹洞宗のお寺ですが、山田町の龍昌寺の住職は、地震の前からお寺を基にボーイスカウトの拠点にしたり、地域の人たちが常に集うような状況があったのです

日ごろからそういうつながりを、宗教を越えてボーイスカウトとか、あるいは別の地域

ではライオンズクラブといったつながりを基に、あるいは婦人会とか。お寺で、あるいは神社で子育て支援の場を設けるとか。そういうことをやっているところは、日ごろから行政と連携ができていている場合もあるのです。

そうすると、地震が起きて、政教分離といわれていろいろな敷居が高いところがある中で、地域社会でそういうふうに連携を持っているところは行政とも情報交換ができていて、指定避難所になっていなくても物資が早く来たり、連携というのができている。今後は、宗教の垣根を越えた連携が大事ではないか。

そういった中で、島菌先生が代表を務められている宗縁連のような、超宗派、または宗教以外の方も関わるような取り組みの継続です。一時的にちょっとやっていうことではなく、今回みたいに継続して情報交換をするようなかたちが大事ではないか。

また、政教分離ということがありますけれども、今回は震災後うちの大学でも、私は宗教社会学、社会学が専門ですけれども、教育学の先生、あるいは防災ボランティアたちの先生と連携して、共同でやるプロジェクトを立ち上げて、研究をするとか。

従来だったら、例えば宗教学と教育学が一緒になって研究するということは、なかなかできなかったかもしれないですけれども、そういった垣根を越えた連携というのも学問の世界でもおきているし、またNPOとかNGO、宗教、お寺といった宗派、垣根を越えた連携というのも今後少しずつできてくるのではないかなと、希望的に思っています。

○鎌田 ありがとうございます。

お二人の発言をまとめて、ポイントだけ整理しておくのと、一つは、方便というものがどのようにして可能かという問題があると思いました。それからもう一つ、壊れてきている中で新たに育てていくときに、稲場さんは共感縁と言いましたが、その新しいネットワーク化をする、これも一つの方便であると思うのですが、そういう力を次の時代に向けてどうクリエートできるかが大きく問われていると思います。では、金子さん、お願いします。

○金子 宗教者に求められるポイントとして、先ほど河合先生の方から、世界観のレベルでどう復興できるかというご質問をいただきました。私は、その問いを受けたときに、宗教体験をしたのは、いったい誰だったのかということを考え直してみました。

宗教体験と言うと、ちょっと先走り過ぎているので、超越体験と言い換えてみると、宗教社会学を研究者である関西大学の宮本要太郎先生がこんなことを言っていました。

それは、今回の東日本大震災で本当に千年に一度の大津波が起こって、原発事故、とにかく想定外の事態、本当にあり得ないことが起こって、そして自分自身がそれを目の当たりにして、それに巻き込まれてしまった。これは一種の超越体験と言っていいのではないかと。

宗教者は、それぞれなんらか超越体験、つまり超越者の臨在体験を持っていて、それに基づいて宗教的信仰をしている場合が多いのですけれども、いったい被災者にとって思い

がけないこの超越体験のことを思うと、それはかなり宗教的な領域に近いものではないのだろうか。やはり震災に関連したある会合の中で、そういう問いかけをされたのです。

私は宗教者でもあり同時に宗教研究者でもあるのですが、この問いかけを聞いて、どうも自分自身の立ち位置をすごく突き動かされるような思いを感じたのです。それは、語弊があるかもしれませんが、そういった超越体験をされた方が、どれほど悲痛な内容であったにせよ、余人にはできなかつたある種の得難い体験だったのではないかと。宗教者ならば、この超越体験から宗教体験を作り出すかもしれない。そして、宗教研究者としては、この体験をこそ研究テーマとして掘り下げるべきではないか。そのようにも考えてしまうわけです。私自身は、その意味で被災者の方の今後の宗教心の変容に強い関心を抱いています。

稲場先生がおっしゃった災害ユートピアについてですが、これは河合先生がおっしゃるように、日本人だけのつながりではないと思うのです。もっと普遍的なものであって、『災害ユートピア』という本で、レベッカ・ソルニットという女性の方が書いていたのを思い出しました。

ソルニットさんによれば、基本的に何を信ずるかによって人間の行動は変わってくるわけですが、結局、人間を普段から信じている人たちは、そういう非常事態になってもパニックを起こさない。むしろパニックを起こすのは、権力者とかエリートと呼ばれている人たちだということです。

実際、今回の大震災においても、日本人は非常に落ち着いているという世界からも評価されました。確かに落ち着いて行動している方がほとんどです。パニックを起こしていたのは、むしろ一国の総理である菅首相だったわけですね。

パニックを起こさなかつた一般の人々は、やはり普段の日常生活の中で、実はマンション住まいをして、満員電車に乗って、会社に通っているような中でも、どこかで人間を信頼していたのではないかと思います。だから、表に現れず、埋もれていった信頼感が、こうした突発的な危機感の中から不意に呼び覚まされたのではないかと。つまり、誰もが持っている人間の信頼の心が、ここに至って現れたと、私は見ております。

そういうことを踏まえていろいろ考えるのです。そこで、質問の方から答えてまいります。

公平性ということでは、やはり共感と深く関係すると思うのです。つまり、自分が共感しているところには、どうしても力が入るわけです。共感の強い弱いで、その人の支援のあり方も強弱が出てきます。それで当然だと思うんですね。

国や自治体は当然、公平性の原理でやらなければいけないけれども、民間人はもう自分の共感するところへどんどんやっていいと思うのです。ですから、差をつけたって全然おかしくないし、差をつけられたところは、別なところがきちっと差をつけてやってくれると信じている。

天理教の場合も、一般的な義援金と、自分たちの教会復興と活動のための支援金と、二

本立てで募金を集めました。そうしたら、両方に目配りしたのか、偶然そうなったのか、義援金と支援金に同じぐらいの金額が集まったわけです。このやり方は正解だったと思っております。

もう一つ、見えないものへの対峙ということです。私も、バナナが1本で400ベクレルというのを初めて知ったぐらいなのですけれども、そういうふうと考えてみると、われわれの普段の日常生活において、放射能というのは決してゼロではなくて、普通に、その辺にうようよして、自分の中に、いつの間にか飛び込んでいる。ちゃんと自分の中にも存在している。

同じように見えないものであるのは、実は信仰心もそうだと思うのです。信仰心も放射能ではないですが、やっぱり見えないものです。さらに言えば、見えない信仰心というものが、実は宗教者と呼ばれている人たちの中だけではなくて、一般の、自分は宗教なんか信じていませんと言う人たちの中にもあるはずで、実際それはあると思うのです。それが今回、そういった突発的な事態で、助け心というかたちで噴出したのだらうと思います。

今回、福島の方は原発の収束がまだ見えない状況ですけれども、それでも、徐々に日常生活へと戻っていくプロセスはあると思うのです。そうした中で、この助け心を、せっかく誰の心の中にも喚起された助け心を、ずっと絶やさずにつないでいく。自分の地域においても、被災地との関わりにおいてもつないでいく。

これに対する旗振りといいますか、実際に行動することを含めてですけれども、後押ししていくことが、私は宗教関係者の一つの役割だろうと思っております。

○鎌田 ありがとうございます。

いま4人の報告者の方から自分の考えを述べていただきました。

ここで、河合さんが先ほど問われた大きい物語の中で、宗教が世界観にどう立ち向かうのかという、その世界観問題というのは、かなり深刻な問題の一つであると思います。

以前は、玄侑さんが言われたように終末論的な意識があって、その終末論的な意識から天罰であるとか、神罰であるとかの考え方が、当然出てくる可能性があるわけですね。

今回も多少は出てきているでしょうけれども、それをブレーキさせる力も同時に起こってきている。この世界観の問題に関して直に、ダイレクトに入っていくタイミングとか、これは非常にデリケートだという感覚がどこか、いまの時期にあると思っています。それほど、実は事態は深刻で、壊れているものが大きいということだと言える。

もう一つは、玄侑さんが言われた生活の中からあるという問題。宗教の一つの特徴として、確かに大きい世界観の物語もあるけれども、小さい小さい生活の具体レベルがあって、この基層生活レベルでどう動いているのかという問題です。どういうふうに人々を根本から、生活の中で支えているか。これも非常に大きいものだと考えます。

それら4人の方の、これに対するレスポンスを踏まえて、河合さんと内田さんの方から、最後のまとめめ的な発言をもらって、ちょっとフロアの皆さんに振っていきたいと思います。

お願いします。

○河合 いろいろとまた語っていただいて、ちょっと長くなってしまおうと思われるのだけど。

物語の柱は、確かに危ないのは大きな物語のハードランディングみたいなのが、とても危ないのではないかなとは僕は思っていて。やっぱり、まずは失われてしまったということ、どれだけ悲しめるかとか、受け入れられるかということが、とても大きいのではないかなと思っています。

そして、原発の部分に関しては、たとえ原発のない国に日本がなっても、それは変わらないと思うのです。放射能とかいうのは、ありとあらゆるところに入っていて、われわれが自然のままの自然って変な言い方なのだけれど、いや、もう生きていないんだということ、とても大事なのではないかなと思っています。

原子力って、オッペンハイマーが最初に核分裂の実験をしたときに、有名な話なのだけれど、その光の中からキリストが立ち上がってくるビジョンが見えたという話があったけど、ある種の神とか、たぶん日本のコンテクトに入っていない神なのではないかなと思っています。だけれど、それとどう付き合うかみたいなことも、実は大きいことではないかなというふうに考えています。だけれど、それをそのまま扱うというのは危ない、難しいことなので。

それから、ネットワークのことを稲場さんが言われていたのだけれども、私はこんなネットワークはしていませんので、友人に教えてもらったのですが、震災後のネットワークも震災一色になりました。

一色になってしまって、ツイッターとかフェイスブックとかで、だいたいみんなくだらないことを書いているじゃないですか。こう何か、茂木健一郎とかが何か買いに行ったとか。本当に日常を言っているものが消えてしまったというところがあって、それが怖いのではないかなと。何か震災一色にしてしまう。

むしろ、心理療法をしていても思うのだけれど、日常とかつまらないことに回帰してけるというか、それがとても大事で。ところが、何かそういうことを書いた人に対して、すごいバッシングみたいなのがあったりというのも聞いているので。

そうすると政府がコントロールしているとか、官僚がコントロールをしているとか、東電がコントロールしているとか、そういうコントロールも怖いだけれど、われわれの内の中でそういうコントロールが働いているというのは、とても怖いことだというふうに思うのです。そういうことに対する目というの、われわれの中で養っていく必要があるのではないかなと。

最後になりますが、どうしてもみんな、いまの時代を転換点だと思いたくなくなるし、ではないかなと思うこともあるのだけれど、そう思うと同時に、何かこう、それが過ぎ去って行って元に戻ることもあるかもしれない。両方を持って見守っていく必要があるなと思

っています。

○鎌田 それでは次に内田さん、お願いします。

○内田 例えばプルトニウム神社はできないという話はありませんけれども、経済的などころで何か恩恵があるけれども怖くもあるということに対して、それを鎮めるとかという発想にはならない。

認知と感情という話をしましたが、それを認知的に理解することができても、やっぱり感情的にそれをきちっと受け入れて、それに対して対処することは難しい。

こういうときにメッセージが単一化されていくというのが、私は逆に怖いことだなとは思っています。これはたぶん何年かたってみて、また考えなければならぬ長期的な話ではないかなということですね。

それから、つながりということに関して、断片的なつながりが組み合わさって有効に働くというのは、まさにネットワーク的なつながりのつくり方という意味で、日本的なやり方だろうと思いますし、有効な感じがしますね。

組織を立ち上げて、そこで何か自分たちが一丸となってやりましようとかというのは、アメリカなんかでは受け入れやすい社会集団のつくり方とされているのですが、そういうことよりも、むしろ例えば共感縁みたいなものでもいいと思うのです。が、自分がなんとなく知っている人がいるとか、ちょっと縁があったとか、何かそういうところから広がっていくようなつながりというものが、日本においては力を発揮するというを示す機会ではないかなと思いました。

一つの宗教観というのもそうですし、一人一人の持っている価値観とか幸福感などを元にしてつながっていく。共感するところから何かつながりが生まれていく。だから、目標を掲げる集団ベースではなくても全然構わない。そういうところが力を持つというメカニズム自体は、すごく面白いことだなというふうに思っています。

○鎌田 いま、それぞれの報告者、また指定討論者から話をしてもらいました。

ちょっと話の観点を変えますけれども、この7月、8月は、日本の伝統文化にとって非常に重要な切り替わりの月ですね。皆さんご存じのように、お盆などの行事がある月です。

伝統的には、まず6月30日に大祓（おおはらい）があります。夏越の祓い。夏に茅の輪をくぐって、新しい再生へ向けて、生活を切り替えていく。そういうときに、京都では有名な祇園祭が行なわれます。祇園祭は大きい社会的な疾病や災いに対して、それをいかにして祓い清め鎮めることができるかという動機から始まりました。それからもう一つ、天神さんの祭りも、菅原道真公の怨霊に社会がどう対応して鎮めるかという問題意識がありました。

まもなく、東北6県では、七夕祭りやお盆が行われていきます。今度仙台で「東北六魂

祭」が行なわれるようですが、東北6県の魂をもう1回振り返り賦活していくことをやろうしているわけですね。そういう、伝統文化がいままでどういうふうに関災や社会的危機に対して立ち向かってきたか、歴史的事例というか知恵としてあったと思います。

けれども、今回その部分ももう1回見直されていると同時に、まったく新しい事態や状況が同時に並行して起きてきている。この辺をどうつないでいくのか。壊れながら、そのに壊れたものをイシスのように再生・再編していくことができるのかが大きく問われていると思います。

今回、宗教を中心にして災害と心のケアというものを考えていくというテーマを立てましたが、さらに2回目、3回目のシンポジウムを継続して行なっていきたいと考えております。

あと10分ほどしかございません。何人かの方に発言していただいて質疑応答をする時間的な余裕がないものですから、まったく司会者の独断と偏見で申し訳ないのですが、今回、この会場に、宗教者や宗教活動をされている方々が何名も来られています。

先ほど、新宗教の活動で天理教のことについて金子さんが報告してくれました。この会場に、金光教の活動をされながら「支援のまちネットワーク」の活動を金子さんたちと一緒にやってこられた渡辺順一さんがいます。そこで渡辺さんに、震災以前からずっと活動していて、この震災を機に変わったものがあるのか、宗教界の変化や宗教的な受け止め方の変化があるのかどうかをポイントに発言していただければと思います。お願いします。

○渡辺 急に当てられまして、びっくりしております。一つ、私はまだ、実は被災地に行っておりません。その中でずっとできることを、あるいは考えねばならないことを考えさせられているようなことです。

直接、お答えしきれないですけど、震災が起きて、いままでずっと考えさせられることが一つありまして、先ほどの発言とも関わるのですけれど、例えば報道が、あまりにも悲惨な被災地の状況一色に、ずっと塗り固められ続けている。原発のことでそうですね。

その中で、光をそういうかたちで当てられた以外の問題が、あまりにも見えなくさせられてきている。いま、玄侑さんが福島で、自殺が4割ぐらいに増えていると言われましたが、ものすごく気になっています。

ただでさえ地域社会が力をなくして、支え合う力がなくなっていったって、日本全体が高齢化していったって、孤立になっていく。その弱った状況の中で被災、震災、あれだけ大きな悲しみに包まれていく。

それに対して、世間の注目が、その一点に集中することによって、もっとひどい状況が知らないところ、見えないところで、どんどん進行している。そのことに対する想像力がどうなっているのかということが、非常に僕は気になっています。

そういうことも含めて、行政とか、政府とか、専門家、学者というものが信用できないという話が、いま出てきましたけれども、報道も含めて自分たちがどこまで小さなネット

ワークの中で、あるいは人間的なつながりの中で、情報量を増やしていくのか。人間の悲しみに対して心を開いていくのか。そういうことが試されていく、そういう時代になっているのではないかなと思います。それが大きな物語と小さな物語をつないでいくことだと思います。

もう一つだけ。宗教自体が、どういうふうに関与するかとか、宗教がどういうふうなネットワークをつくるかということが問題なのですけれども、やはり個人の力、教団とか組織自体が近代化の中で疲弊しておりますので、それを開いていくというのは、個人が縁の中でつながり合った、そこでの出会いの力、悲しみや苦しみや喜びと出合っていく。それこそ人間力がこれから試されていって、それが時代を切り開く唯一の起爆剤になるのではないかと思います。

○鎌田 ありがとうございます。

新宗教の中でも、教派神道と呼ばれてきて、もうほとんど伝統宗教になっているような天理教、金光教などは、日本の社会に根付いているとも思うのですが、しかし先ほど金子さんが言われたように、新宗教に対する偏見などの側面もあるかとも思います。

最後に、天理教や金光教などの教派神道以降に登場してきた日本の新宗教の中で大本や世界救世教がありますが、今日、その大本や世界救世教の方もお見えです。京都の綾部と亀岡に生まれた神道系新宗教の大本の出口孝樹さんが来られているので、今回の震災以前、以後を含めての宗教者としての捉え方や生き方、あるいは社会的取り組みに関して、考えるところがあつたら発言していただきたいと思います。お願いします。

○出口 すみません。綾部からまいりました出口孝樹と申します。本当に突然で、まさか指名されると思っていまませんでしたので、いま口から心臓が出そうな感じがしまして、鎌田先生のお声も遠く聞こえてきたような感じが致します。

確かに3月11日の震災から、私たち信仰者、宗教者に対して、震災がどうなんや、どういうふうにして、これは捉えたらいいんや、また出口王仁三郎は、どういうふうにして、これを見ているんや、大本ではどういうふうにして考えているんやと、常に問われるようなことが多く、また自分の中でもどのように捉えたらいいのか、あまりに大きな出来事に直面して、なかなか言葉が出ないような状況があつたのですけれども、私たちの出口なお、出口王仁三郎以来の大本には、教え、教義があります。そうしたもののなかから言葉を紡ぎ出して大本の信者、信徒の方には発言し、またいろいろ求めてきていただく方に対しては、そのお話をさせていただいている。本当に徹々たるものですが、させていただいているようなところです。

今回の震災で心のケアという問題がいろいろとお話をされて、また宗教者の役割ということについてもお話がされてきたわけですが、一つ感じることは、特にこの震災後、宗教者が、先ほど鎌田先生がオウム真理教の事件以後、宗教界では非常に大きな問題がま

だ解決されていないとおっしゃっておられました、宗教としての大きな遠慮というか、自らを規制する心というのが非常に大きくて、またそういうものが大きなニーズにマッチしていないというか、大切なところが提供できていないような気がずっとしておりました。

ですから、この震災で特に思いますのは、亡くなられた人たち、大切な人を亡くされた人たちに対する、われわれの言葉で言えば、靈魂観や霊界観について、また、詳しくは分かりませんが、仏教の方であれば、亡くなられてどういうところに行かれるんや、人の生とはどういうことなんやということ、また新宗教であれば新宗教のそれぞれの本当の生の言葉で、より宗教らしく話していくことが大事であり、求められているのではないかと感じています。

最後に、同時に、私たちは教派神道の流れでありますので、やはり祭りというものが非常に大事であるのだろうと考えます。神道には日本神話があるわけですが、大きな広い広い世界観を持つ神話と、それぞれの一人一人の生活が結び付くのは、やはり祭りであると思います。神と人、神様と地域をつなぐのが祭りです。

神社が流されたようなところで祭りを行うのは大変困難なことではあるのですが、神代から続いてきた祭りを未来につないでいくことで、先も見えないような今ですが、復興の先の未来へとつながっていくのではないかと感じております。

○鎌田 ありがとうございます。渡辺さんと出口さんのお二人には、突然の指名をして大変失礼しましたが、今回のテーマが、災害と宗教と心のケアで、伝統仏教の立場から玄侑さん、神社神道の方から私、新宗教の中から金子さんとか、ほかの方々も関わっているので、いま金光教と大本教という、関西が宗教活動の基盤であるこの二つの新宗教の方から発言をいただきました。

今回のシンポジウムで私たちは、ある一つの方向性とか結論を付けようと思っていただけではありません。何が今起こっているのか。現状がいったい何であるのかということ、それぞれの立場からきちんと問題提起をしてほしい。そこにどういう理解が必要なのか。その辺の整理はやっぱり学問の重要な役割だと思います。

その問題に対して、では、どういう取り組みの可能性とか方向性があり得るのか。その辺のところを議論することを通して、先ほどの認知と感情の問題とつながりますが、感情の部分の整理しきれないもやもやとしたものをはっきりとした道筋の中で1回整理してみようというのが今回のシンポジウムの試みです。

宗教が宗教であるゆえんは、その認知と感情を、もう一つ大きい物語や世界観や、祭りなら祭りという儀礼とか、修行なら修行という仕組みの中に落とし込んで、それをもう1回、「ご破算で願いましては」ではないのですがリセットするというか、クリーニングする、それが宗教の持つ大きい力ではないかと思えます。

しかし、今までのやり方が機能しない部分がある。その従来の方法論では機能しない部分を含めて、これから先、さらに問題点を洗い出し、検討していきたいと思えます。この

研究プロジェクトはこれからも、次回、次々回と続いていく研究プロジェクトですので、
また次の機会にお越しいただければと思います。

最初、法螺貝で始まりました。最後も法螺貝でも閉めたいと思います。（法螺貝演奏）
長時間、ほんとうにありがとうございました。

（終了）